

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第22集

上越新幹線埋蔵文化財調査報告

—V—

天神林・高野谷戸

1983

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第22集

## 上越新幹線埋蔵文化財調査報告

—V—

てん じんばやし たか の や と  
天神林・高野谷戸

1983

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

## 序

上越新幹線は東京・新潟間の太平洋側と日本海側を2時間程で結ぶメインルートとして建設されているもので、関越高速自動車道とともに人的交流のみならず、産業、経済の大動脈であります。

本県内における上越新幹線は、当初、大宮市から上里町まで、県の中央部を南北約65.1kmにわたって建設されました。この区間の埋蔵文化財の取り扱いについては埼玉県教育委員会と、日本鉄道建設公団東京新幹線建設局とで慎重に協議を重ねました。しかし、後述しているように路線決定にあたり、どうしても避けられない遺跡があり、これについては、やむを得ず、発掘調査を実施して記録保存の措置を講ずることになりました。

上里町所在の天神林、高野谷戸遺跡の発掘調査は昭和50年度に埼玉県教育委員会が日本鉄道建設公団東京新幹線建設局の委託を受けて実施し、その整理作業は昭和57年度に当事業団が委託を受けて行なったものであります。

本書はその報告書でありますが、刊行にあたり、多くの方々から種々の御協力、御指導をいただいた日本鉄道建設公団東京新幹線建設局、同本庄鉄道建設所、上里町教育委員会及び地元関係者の方々に改めて深く感謝いたします。

昭和58年3月

財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 長井五郎

## 例　　言

- 1 本書は上越新幹線建設事業にかかる上里町大字東五明及び五明に存在する天神林遺跡（上里1号A）、高野谷戸遺跡（上里1号B）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は日本鉄道建設公団の委託により、埼玉県教育委員会が主体となって昭和50年度に実施された。報告書作成作業は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が昭和57年度に受託し、実施した。
- 3 発掘調査は埼玉県教育局文化財保護課第3係があたり、天神林遺跡については小久保徹、中島宏が担当し、昭和50年12月15日から昭和51年3月19日まで、高野谷戸遺跡については駒宮史朗が担当し、昭和51年1月29日から3月25日まで実施した。
- 4 出土品の整理及び図の作成は主に昼間孝志があたり、外尾常人、酒井和子の協力があった。
- 5 本書の執筆は小久保徹、駒宮史朗、昼間孝志、金子直行があたった。分担については以下に示すとおりである。  
小久保 I-1、III-1、2、3  
駒宮 IV-1、2、3、VI-2  
昼間 II、III-3、IV-3、V-3、VI-1  
金子 V-1、2
- 6 掘図の縮尺は、個別遺構は1/60、出土遺物は1/4を原則としたが、一部例外もある。
- 7 土器観察表の胎土欄のAは砂粒、A'は細砂粒、Bは金雲母、B'は雲母、Cは赤色粒子、Dは白色粒子、Eは黒色粒子、Fはその他とした。また、大きさ(cm)欄の( )内の数値は推定値である。
- 8 本書の編集は、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査研究第4課があたり、横川好富が監修した。

# 目 次

序

例言

I 調査の概要.....	1
1 調査に至るまでの経過.....	1
II 遺跡の立地と環境.....	4
III 天神林遺跡.....	8
1 調査の経過（日誌抄）.....	8
2 遺跡の概観.....	9
3 遺構と出土遺物.....	11
(1) 天神林遺跡1号住居跡.....	11
(2) 天神林遺跡2号住居跡.....	12
(3) 天神林遺跡3号住居跡.....	13
(4) 天神林遺跡4号住居跡.....	13
(5) 天神林遺跡5号住居跡.....	17
(6) 天神林遺跡6号住居跡.....	24
(7) 天神林遺跡7号住居跡.....	36
(8) 天神林遺跡8号住居跡.....	42
(9) 天神林遺跡9号住居跡.....	44
(10) 天神林遺跡10号住居跡.....	45
(11) 天神林遺跡11号住居跡.....	48
(12) 天神林遺跡12号住居跡.....	51
(13) 天神林遺跡13号住居跡.....	53
(14) 天神林遺跡14号住居跡.....	56
(15) 天神林遺跡15号住居跡.....	57
(16) 天神林遺跡16号住居跡.....	60
(17) 天神林遺跡17号住居跡.....	70
(18) 天神林遺跡18号住居跡.....	72
(19) 天神林遺跡19号住居跡.....	76
(20) 天神林遺跡20号住居跡.....	79
(21) 天神林遺跡21号住居跡.....	81
(22) 天神林遺跡22号住居跡.....	89
(23) 天神林遺跡23号住居跡.....	91
(24) 天神林遺跡24号居住跡.....	98
(25) 天神林遺跡1号建物跡.....	100
(26) 天神林遺跡2号建物跡.....	102
(27) 天神林遺跡3号建物跡.....	104
(28) 天神林遺跡柱穴列.....	104
(29) 天神林遺跡ピット群.....	105
(30) 天神林遺跡土壤.....	105
(31) 天神林遺跡溝1.....	115
(32) 天神林遺跡溝2.....	117

IV 高野谷戸遺跡	118
1 調査の経過（日誌抄）	118
2 遺跡の概観	119
3 道構と出土遺物	120
(1) 高野谷戸遺跡 1号住居跡	120
(2) 高野谷戸遺跡 2号住居跡	128
(3) 高野谷戸遺跡 3号住居跡	131
(4) 高野谷戸遺跡 4号住居跡	134
(5) 高野谷戸遺跡 5号住居跡	136
(6) 高野谷戸遺跡 6号住居跡	139
(7) 高野谷戸遺跡 7・8号住居跡	140
(8) 高野谷戸遺跡 9・10号住居跡	143
(9) 高野谷戸遺跡土壙	146
V その他の遺物	154
1 天神林遺跡出土繩文式土器	154
2 石 器	154
3 瓦	159
VI 結 語	160
1 天神林遺跡の住居跡について	160
2 高野谷戸遺跡の道構と遺物について	162
VII 付 篇	165
1 胎土分析	165
2 X線回折分析及び電子顕微鏡観察	172

## 挿 図 目 次

第 1 図 周辺の主要遺跡分布図	5	第 29 図 11号住居跡	48
第 2 図 遺跡周辺の地形図	6	第 30 図 11号住居跡出土遺物	50
第 3 図 天神林遺跡遺構配置図	9	第 31 図 12号住居跡	52
第 4 図 天神林遺跡遺跡全体図(折り込み)		第 32 図 12号住居跡出土遺物	52
天神林遺跡		第 33 図 13号住居跡	53
第 5 図 1号住居跡	11	第 34 図 13号住居跡出土遺物	54
第 6 図 1号住居跡出土遺物	11	第 35 図 14号住居跡	56
第 7 図 2号住居跡	13	第 36 図 14号住居跡出土遺物	57
第 8 図 3・4号住居跡	14	第 37 図 15号住居跡	58
第 9 図 4号住居跡出土遺物	15	第 38 図 15号住居跡出土遺物	59
第 10 図 5号住居跡	17	第 39 図 16号住居跡	61
第 11 図 5号住居跡出土遺物(1)	19	第 40 図 16号住居跡出土遺物(1)	62
第 12 国 5号住居跡出土遺物(2)	22	第 41 国 16号住居跡出土遺物(2)	65
第 13 国 6号住居跡(1)	25	第 42 国 16号住居跡出土遺物(3)	67
第 14 国 6号住居跡(2)	26	第 43 国 16号住居跡出土遺物(4)	68
第 15 国 6号住居跡出土遺物(1)	28	第 44 国 17号住居跡	71
第 16 国 6号住居跡出土遺物(2)	31	第 45 国 17号住居跡出土遺物	72
第 17 国 6号住居跡出土遺物(3)	33	第 46 国 18号住居跡	72
第 18 国 6号住居跡出土遺物(4)	34	第 47 国 18号住居跡出土遺物	75
第 19 国 6号住居跡出土遺物(5)	36	第 48 国 19号住居跡	77
第 20 国 7号住居跡	37	第 49 国 19号住居跡出土遺物	77
第 21 国 7号住居跡出土遺物(1)	38	第 50 国 20号住居跡	79
第 22 国 7号住居跡出土遺物(2)	41	第 51 国 20号住居跡出土遺物	80
第 23 国 8号住居跡	42	第 52 国 21号住居跡	82
第 24 国 8号住居跡出土遺物	43	第 53 国 21号住居跡出土遺物(1)	84
第 25 国 9号住居跡	45	第 54 国 21号住居跡出土遺物(2)	87
第 26 国 9号住居跡出土遺物	45	第 55 国 22号住居跡	89
第 27 国 10号住居跡	46	第 56 国 22号住居跡出土遺物	90
第 28 国 10号住居跡出土遺物	47	第 57 国 23号住居跡	92

第 58 図 23号住居跡出土遺物(1).....	94	第 82 図 3号住居跡カマド.....	131
第 59 図 23号住居跡出土遺物(2).....	97	第 83 図 3・5号住居跡.....	132
第 60 図 24号住居跡.....	98	第 84 図 3号住居跡出土遺物.....	133
第 61 図 24号住居跡出土遺物.....	99	第 85 図 4号住居跡.....	134
第 62 図 1号建物跡(1).....	100	第 86 図 4号住居跡カマド.....	135
第 63 図 1号建物跡(2).....	101	第 87 図 4号住居跡出土遺物.....	136
第 64 図 2号建物跡(1).....	102	第 88 図 5号住居跡カマド.....	136
第 65 図 2号建物跡(2).....	103	第 89 図 5号住居跡出土遺物.....	137
第 66 図 土壙(1).....	106	第 90 図 6号住居跡.....	139
第 67 図 土壙(2).....	107	第 91 国 6号住居跡出土遺物.....	140
第 68 国 土壙(3).....	108	第 92 国 7・8号住居跡.....	141
第 69 国 グリッド出土遺物(1).....	110	第 93 国 7号住居跡出土遺物.....	142
第 70 国 グリッド出土遺物(2).....	114	第 94 国 9・10号住居跡.....	143
第 71 国 溝 1.....	116	第 95 国 9号住居跡カマド.....	144
第 72 国 溝 2.....	117	第 96 国 9号住居跡出土遺物.....	146
第 73 国 高野谷戸遺跡全体図(折り込み)		第 97 国 土壙.....	147
高野谷戸遺跡		第 98 国 表土層出土遺物(1).....	149
第 74 国 1号住居跡カマド.....	120	第 99 国 表土層出土遺物(2).....	153
第 75 国 1号住居跡.....	121	第 100 国 天神林遺跡出土繩文式土器.....	154
第 76 国 1号住居跡出土遺物(1).....	122	第 101 国 天神林遺跡出土石器(1).....	155
第 77 国 1号住居跡出土遺物(2).....	124	第 102 国 天神林遺跡出土石器(2).....	157
第 78 国 1号住居跡出土遺物(3).....	127	第 103 国 天神林・高野谷戸遺跡出土	
第 79 国 2号住居跡カマド.....	128	石器(3).....	158
第 80 国 2号住居跡.....	129	第 104 国 天神林・高野谷戸遺跡出土瓦.....	159
第 81 国 2号住居跡出土遺物.....	130		

## 図版目次

- 図版1 天神林遺跡遺跡遠景（西より）  
天神林遺跡発掘調査風景（北より）
- 図版2 天神林遺跡1号住居跡  
天神林遺跡2号住居跡
- 図版3 天神林遺跡3号住居跡  
天神林遺跡4号住居跡
- 図版4 天神林遺跡5号住居跡  
天神林遺跡6号住居跡
- 図版5 天神林遺跡6号住居跡カマド付近  
天神林遺跡7号住居跡
- 図版6 天神林遺跡7号住居跡縄出土状態  
天神林遺跡8号住居跡
- 図版7 天神林遺跡9号住居跡  
天神林遺跡10号住居跡遺跡出土状態
- 図版8 天神林遺跡11号住居跡  
天神林遺跡12号住居跡
- 図版9 天神林遺跡13号住居跡  
天神林遺跡14号住居跡
- 図版10 天神林遺跡15号住居跡  
天神林遺跡15号住居跡縄出土状態
- 図版11 天神林遺跡16号住居跡  
天神林遺跡17号住居跡
- 図版12 天神林遺跡18号住居跡  
天神林遺跡19号住居跡
- 図版13 天神林遺跡20号住居跡遺物出土状態  
天神林遺跡21号住居跡
- 図版14 天神林遺跡21号住居跡カマド付近  
天神林遺跡22号住居跡
- 図版15 天神林遺跡23号住居跡遺物出土状態  
天神林遺跡24号住居跡
- 図版16 天神林遺跡1号建物跡  
天神林遺跡2号建物跡
- 図版17 天神林遺跡1号建物跡柱痕(1)
- 図版18 天神林遺跡1号建物跡柱痕(2)
- 図版19 天神林遺跡5号住居跡出土遺物
- 図版20 天神林遺跡6号住居跡出土遺物(1)
- 図版21 天神林遺跡6号住居跡出土遺物(2)
- 図版22 天神林遺跡7号、10号、11号住居跡  
出土遺物
- 図版23 天神林遺跡13~15号住居跡出土遺物
- 図版24 天神林遺跡16号住居跡出土遺物
- 図版25 天神林遺跡19、21号住居跡出土遺物
- 図版26 天神林遺跡22~24号住居跡出土遺物
- 図版27 高野谷戸遺跡遺跡近景（南より）  
高野谷戸遺跡1号住居跡遺物出土状態(1)
- 図版28 高野谷戸遺跡1号住居跡遺物出土状態(2)  
高野谷戸遺跡2号住居跡遺物出土状態
- 図版29 高野谷戸遺跡2号住居跡カマド付近  
高野谷戸遺跡3号住居跡遺物出土状態
- 図版30 高野谷戸遺跡3号住居跡カマド付近  
高野谷戸遺跡4号住居跡遺物出土状態

- 図版31 高野谷戸遺跡3号、5号住居跡遺物  
出土状態  
高野谷戸遺跡6号住居跡遺物出土状態
- 図版32 高野谷戸遺跡7号、8号住居跡  
高野谷戸遺跡7号住居跡遺物出土状態
- 図版33 高野谷戸遺跡9号住居跡遺物出土状態
- 高野谷戸遺跡遺跡全景（北より）
- 図版34 高野谷戸遺跡1号住居跡出土遺物(1)
- 図版35 高野谷戸遺跡1号住居跡出土遺物(2)
- 図版36 高野谷戸遺跡2～5号住居跡出土遺物
- 図版37 高野谷戸遺跡5号、6号、7号、9号住居跡表および土層出土遺物
- 図版38 天神林遺跡出土縄文式土器  
天神林遺跡出土石器

## I 調査の概要

### 1 発掘調査に至るまでの経過

上越新幹線の基本計画は、東京都と新潟県を結ぶものであるが、昭和46年10月、工事実施計画の認可されたのは、埼玉県大宮市、新潟県新潟市間 270 キロメートルである。

この上越新幹線のルートは、昭和46年10月「埼玉県行政推進対策委員会軌道交通部会」（以下「軌道交通部会」という。）において日本鉄道建設公団から、建設概要について説明があった。

昭和46年10月に、埼玉県開発部長から文化財保護課長あて「新幹線建設計画図（5万分の1）」が送付され、これによると、いくつかの遺跡にかかることが明瞭であった。

昭和56年11月軌道交通部会において、新幹線の建設に対して各課の意見が聴取された。文化財保護の面では、国及び県指定文化財及び周知の遺跡については、路線計画からはずすこと、また、その他の埋蔵文化財包蔵地については、損傷を最少限度にとどめてルートを決定するよう要望した。

日本鉄道建設公団では、埋蔵文化財の所在と、その取扱いについては、特に注意が払われ、昭和51年4月1日付けで、文化財保護委員会（現文化庁）と公団とで締結した「日本鉄道建設公団の事業施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」に基づいて、他の関連公共事業とは切りはなして協議を進めることとし、昭和48年3月1日、日本鉄道建設公団・県開発部軌道交通対策課及び文化財保護課の三者で具体的な打合せ会を開催した。

この打合せ会では、公団側から、上越新幹線建設予定地内の文化財の調査について、次のとおり依頼があった。

- 1 2500分の1の平面図を用意するので路線予定地内の文化財の所在調査を実施して欲しいこと。
- 2 路線内に係る埋蔵文化財包蔵地については、知事部局の諸調査とは別に調査事業を県教育委員会に委託したいこと。

昭和47年11月初旬、日本鉄道建設公団東京新幹線建設局から2500分の1の計画路線図（幅員50m）が届けられ、11月20日・21日の両日、文化財保護課第二係の職員で、伊奈町側と上里町側からの2班に分かれて遺跡分布確認調査を実施した。なお、場所によっては、時期的に地上観察の困難なところもあり、それは後日に残し、一応計画路線内における文化財の分布状況を把握することができた。

そして、昭和48年3月19日付け教文第1167号で、埼玉県教育委員会教育長から、日本鉄道建設公団東京新幹線建設局長あて、「上越新幹線建設用地（伊奈～上里）内における文化財の所在及び取扱いについて」以下の文書を上越新幹線文化財分布図一式（幅員50mによる）を添付して送付した。

- 1 県指定旧跡については、現状変更届を提出すること。
- 2 埋蔵文化財については、記録保存の措置を講ずること。
- 3 埋蔵文化財の保存にあたっては、遺漏のないよう当局（文化財保護課）と十分協議すること。

遺跡番号	遺跡名 称	所 在 地	種 別	時 代
伊奈 1 号	(西浦遺跡)	北足立郡伊奈町大字小室字西浦4962—1	包含地	縄文
伊奈 2 号	(上新田遺跡)	北足立郡伊奈町大字小室字上新田5062	集落跡	縄文
伊奈 3 号	(北遺跡)	北足立郡伊奈町大字大針字原579	集落跡	
伊奈 4 号	(原遺跡)	北足立郡伊奈町大字大針字原	集落跡	縄文
吹上 1 号	(石田堤・台遺跡)	北足立郡吹上町袋字堤根・台字353	堤・集落跡	戦国・平安
熊谷 1 号	(三ヶ尻林遺跡)	熊谷市大字三ヶ尻字林3389	円墳	古墳
深谷 1 号	(前畠遺跡)	深谷市大字柏合字前畠468	集落跡	奈良・平安
深谷 2 号	(鳥之上遺跡)	深谷市大字柏合字鳥之上1165	集落跡	縄文
深谷 3 号	(出口遺跡)	深谷市大字柏合字拾三塚1089—1	集落跡	縄文
岡部 1 号	(芝山遺跡)	大里郡岡部町大字岡部字芝山292—4	集落跡	縄文
岡部 2 号	(伊勢塚遺跡)	大里郡岡部町大字後槇沢字伊勢塚252—1	集落跡	縄文・古墳
岡部 3 号	(東光寺裏遺跡)	大里郡岡部町大字後槇沢字新井566	集落跡	縄文・古墳
岡部 4 号		大里郡岡部町大字後槇沢	集落跡	古墳
本庄 1 号	(古川端遺跡)	本庄市大字栗崎字古川端1108	集落跡	縄文・古墳
本庄 2 号	(東谷遺跡)	本庄市大字栗崎字東谷149—3	集落跡	古墳
本庄 3 号	(前山 2 号墳)	本庄市大字北畠字前山2139	円墳	古墳
本庄 4 号	(下田遺跡)	本庄市大字東富田字下田181	集落跡	古墳・奈良
本庄 5 号	(諏訪遺跡)	本庄市大字今井字諏訪647—2	集落跡	古墳
上里 1 号		児玉郡上里町大字東五明	円墳	古墳
本庄 A 号	莊小太郎頼家墓	本庄市大字栗崎	県指定旧跡	

昭和48年5月上越新幹線工事工程と文化財の調査について、日本鉄道建設公団東京新幹線建設局との打合せ会が開催された。その席上公団側から、伊奈町地内については、昭和48年度中には用地交渉等が不可能であること。深谷1～2号岡部1号、本庄1～5号遺跡については、昭和48年度中に発掘調査を実施して欲しい旨の要望があった。また、文化財保護側では、石田堤及び熊谷1号遺跡については、別途協議すること、との2点について公団に申し入れを行うと同時に、現体制で、48年度中に、公団の要望する発掘調査の全てについて実施することは不可能であることも合せて報告した。

昭和48年9月14日付け、東建用三第985号で、東京新幹線建設局長から、県教育委員会を経由して文化庁長官あて「上越新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いについて」の協議が行なわれると同時に、東京新幹線建設局長から埼玉県教育委員会教育長あてに「埋蔵文化財の発掘調査を埼玉県教育委員会に委託したい」旨の協議がなされた。

そして、昭和48年11月1日付け教文第647号で、埼玉県教育委員会教育長から日本鉄道建設公団東京新幹線建設局長あて、昭和48年度の発掘調査遺跡について計画書等を添えて通知し、同年11月5日から発掘作業が開始された。

なお、吹上1号遺跡の石田堤は保存し、集落跡の調査をすることとし、本庄A号遺跡（莊小太郎頼家墓）、上里1号遺跡の古墳・岡部4号遺跡は、いずれも、建設路線外であることが確認されたため、発掘調査の対象からはずした。

その後、上里1号遺跡については昭和50年に新たに2ヶ所の集落跡があることがわかり、上里1A号・上里1B号と仮称した。また昭和53年に上越新幹線熊谷駅舎改築に伴う貨物ターミナルの変

更で、熊谷市三ヶ尻地区的貨物授受施設が拡張されることになり、ここに遺跡がかかることが判明し、熊谷 2 号遺跡として調査対象に追加することになった。

その後昭和55年度に財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が発足し、從来埼玉県教育委員会が実施してきた事業をそのまま引き継ぐことになった。そして伊奈町地区の用地買収が進んだ段階で、今まで立入りができなかった地域の分布調査が実施され、また新たに遺跡が発見され、伊奈 5-1 号、伊奈 5-2 号、伊奈 6 号、伊奈 7 号が追加された。

遺跡番号	遺跡名称	所在地	種別	時代
上里 1 号 A	(天神林遺跡)	児玉郡上里町大字五明字天神林972	集落跡	古墳
上里 1 号 B	(高野ケ谷戸遺跡)	児玉郡上里町大字五明字高野谷戸1023-1	集落跡	古墳
熊谷 2 号	(三ヶ尻天王遺跡)	熊谷市三ヶ尻3407	集落跡	古墳
伊奈 5-1 号	(八幡谷遺跡)	北足立郡伊奈町大字羽貫字八幡谷204-1	集落跡	縄文・平安
伊奈 5-2 号	(相野谷遺跡)	北足立郡伊奈町大字小針内宿字向小針1687	集落跡	平安
伊奈 6 号	(丸山遺跡)	北足立郡伊奈町大字小室字丸山908	包含地	縄文
伊奈 7 号	(向原遺跡)	北足立郡伊奈町大字小針内宿字向原1252	集落跡	古墳

発掘調査は以下の年次毎に実施され、既に報告書が刊行されたものもある。

年 度	遺 跡 名
48	深谷 1 号、深谷 2 号、深谷 3 号、岡部 1 号、本庄 2 号、本庄 3 号
49	本庄 1 号、本庄 2 号、本庄 4 号、本庄 5 号
50	岡部 2 号、岡部 3 号 [上里 1 A・1 B 号 (天神林・高野ケ谷戸遺跡)]
53	熊谷 2 号
54	熊谷 1 号、吹上 1 号
55	熊谷 1 号、伊奈 1 号、伊奈 2 号、伊奈 3 号、伊奈 5-1 号、伊奈 7 号
56	伊奈 2 号、伊奈 3 号、伊奈 4 号、伊奈 5-1 号、伊奈 6 号、伊奈 7 号

### 発掘調査の組織

#### 1 発掘(昭和50年度)

主 体 者 埼玉県教育委員会

教 育 長 豊 田 重 穂

事 務 局 埼玉県教育局文化財保護課

課 長 柳 田 敏 司

課長補佐兼 野 村 鍋 一

庶務係長 野 村 鍋 一

企画調整 文 化 財 吉 川 國 夫

第二係長 塩 野 博 雄

宮 崎 朝 子

庶務經理 庶 務 係 持 田 ま り こ

太 田 和 正 夫

桂 千 修 平

發掘調査 文 化 財 第 三 係 長 横 田 好 富

千 村 修 平

小 川 良 沢

小 久 保 徹 敬

駒 宮 朗 宏

中 島 朗 宏

発掘調査 児玉郡上里町教育委員会

協 力 五明地区区長及び地元住民

#### 2 整理(昭和57年度)

主 体 者 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長 長 井 五 郎

副 理 事 長 岩 上 進

常 務 理 事 渡 辺 澄 夫

事務局 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

庶務經理 管理部長 佐 野 長 二

閑 福 栄 一

本 福 浩 人 子

庄 田 啓 一

横 田 好 富

整 理 調 研 究 長 小 川 良 祐

調 研 長 小 川 良 祐

第 五 研 究 長 小 川 良 祐

調 第 四 研 究 長 小 川 良 祐

調 第 三 研 究 長 小 川 良 祐

調 第 二 研 究 長 小 川 良 祐

## II 遺跡の立地と環境

天神林遺跡は埼玉県児玉郡上里町東五明字天神林 972 他に、高野谷戸遺跡は同郡上里町五明字高野谷戸1023-1他に所在する。国鉄高崎線神保原駅からは西方約3.5kmに位置しており、天神林遺跡から小谷を隔て、北西へ約150m離れた地点が高野谷戸遺跡である。2遺跡をのせる地域は神流川右岸に広がる氾濫原の比較的平坦な自然堤防上にあり、標高は73m弱を測る。

児玉郡上里町は埼玉県の最北部に位置し、東は本庄市、南は児玉郡児玉町、西は児玉郡神川村、北は神流川、烏川を境として、群馬県の藤岡市、多野郡新町、佐波郡玉村町と接している。上里町を含む児玉地域は北部を川で囲まれ、西は秩父山地から連なる上武山地、南は秩父山地から張り出した松久丘陵や児玉丘陵という第3紀層の丘陵があり、各々、山崎山と諏訪山、大久保山（浅見山）と生野山という標高110m～140m程の残丘性の独立丘が突出した形で存在している。東には妻沼低地が広がり、利根川に面している。これらの山地、丘陵、低地に囲まれるようにして、本庄台地が上里町、本庄市、児玉町、美里村にまたがっている。本庄台地は北側を神流川に、南は身馴川によって開析され、それぞれ扇状地が形成され、自然堤防が広がっている。身馴川は皆野町浦山付近から源を発するもので、児玉町を通り、岡部町西田付近で志戸川と合流している。一方、埼玉県、群馬県、山梨県境付近に源とする神流川は神川村新宿付近に扇頂部の端を発し、烏川を合流する上里町金久保付近から本庄台地北東縁まで北東方向に広がる大きな扇状地を形成している。また扇端部に当る本庄台地の北東部付近は多くの湧水地が存在している。

天神林、高野谷戸両遺跡をのせる自然堤防はたび重なる神流川の氾濫によって形成され、部分的には女堀川付近にも見られるが、神流川付近程、大小の礫を多く含んだ粘土層の堆積量が増え、ローム層は殆ど見られない。砂利を多く含む層中には数cmにわたって砂層の堆積がみられる箇所もあり、一時期、安定した水の流れがあったことが推察される。また、このような礫を多く含む粘質土層は氾濫によって形成されている為に水平な堆積はされず、天神林、高野谷戸遺跡のように近距離にありながら、現地表から遺構確認面までは大きく異なった数値となって現われることも生じている。

上里町の多くは前述した神流川の氾濫土で覆われており、過去には縄文時代の遺跡は存在しないものとして考えられていたが、最近ではローム層の残る大御堂付近では縄文中期の遺跡が確認され、自然堤防上では今回報告する天神林遺跡から縄文後期、周辺の若宮台遺跡からも縄文中期の土器片が少數ではあるが出土しているほか、他の遺跡でも縄文前期から後期にかけて土器片や石器が多く出土することが確認されている。これらの土器片は自然堤防上の遺跡から出土した土師器の破片同様、器面の磨滅が著しい場合が多い。また、中期の土器には長野系の土器も混入している。

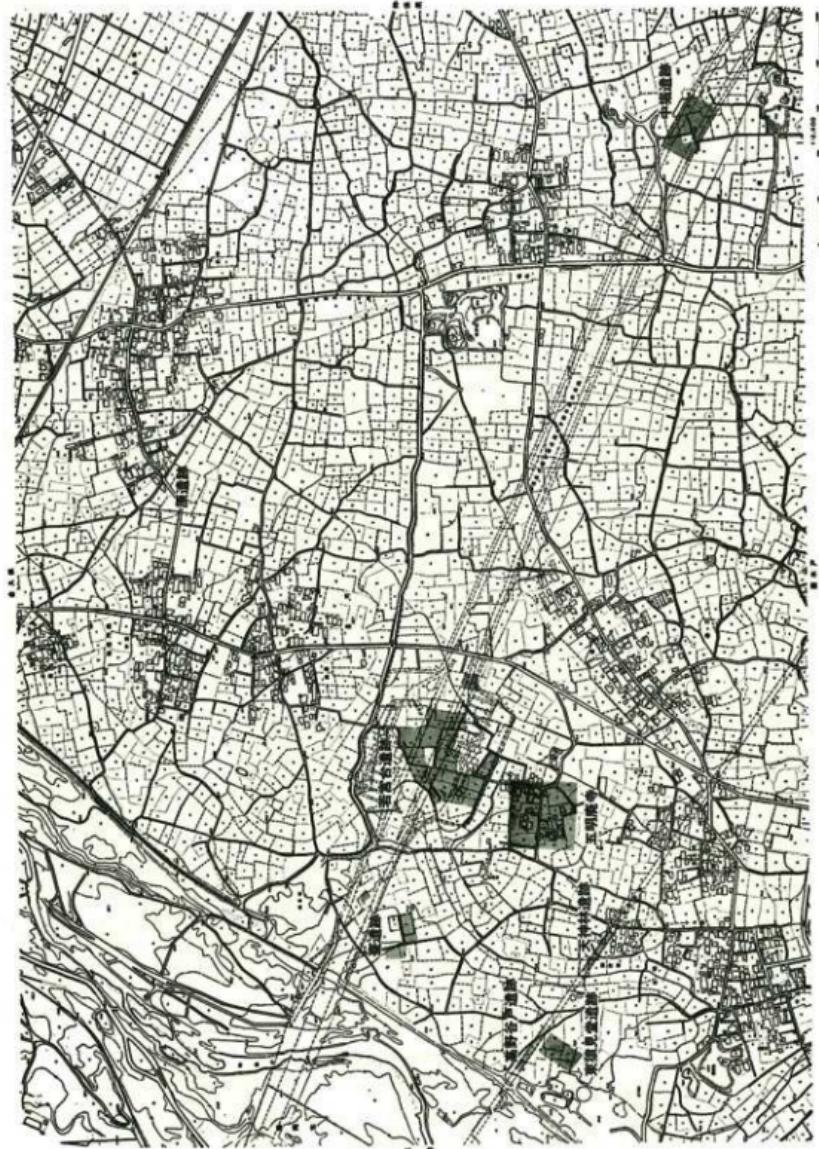
弥生時代から古墳時代前期にかけての遺跡は縄文時代と同様少なく、神流川扇状地や身馴川扇状地付近でも弥生時代の遺跡、遺物は殆ど確認されていない。しかし、古墳時代前期になると僅かに愛宕遺跡、若宮台遺跡（註1）が既調査され、身馴川（小山川）扇状地付近には古川端遺跡、樋の口遺跡、北貝戸遺跡などの集落の存在が確認されており、次第に丘陵や本庄台地南部にも集落が進



周辺の主な古墳時代後期の集落跡（既調査）

- |                   |                      |                          |
|-------------------|----------------------|--------------------------|
| 1. 天神林道跡（古墳・後）    | 8. 中道道跡（古墳・後～平安）     | 15. 東谷道跡（古墳・後）           |
| 2. 高野谷戸遺跡（古墳・後）   | 9. 西北原道跡（古墳・後）       | 16. 後張道跡（古墳・前～後）         |
| 3. 東張見堂遺跡（古墳・後）   | 10. 宇佐久保道跡（古墳・後）     | 17. 下田道跡（古墳・前～平安）        |
| 4. 登道跡（古墳・後）      | 11. 田舎神社前道跡（古墳・後～平安） | 18. 菓跡道跡（古墳・前～奈良）        |
| 5. 若宮台道跡（古墳・後～平安） | 12. 吉下道跡（古墳・前～平安）    | 19. 西浦北道跡（绳文・古墳～平安）      |
| 6. 原道跡（古墳・後～奈良）   | 13. 雷電下道跡（古墳・前～平安）   | 20. 大苦日道跡（绳文・弥生・古墳・前～平安） |
| 7. 桥達馬道跡（古墳・後～平安） | 14. 古川端道跡（绳文・古墳・平安）  |                          |

第1図 周辺的主要遺跡分布図



第2図 遺跡周辺の地形図

とする傾向が窺われる。

古墳時代後期になると前期に集落の営まれなかったと考えられる神流川扇状地を基盤とする地域を含め全体に活発な動きがみられ、前期には身駒川流域のみにしかなかった古墳群が鬼高瀬から出現し、集落も増大する。当地域周辺では東猿見堂遺跡、臺遺跡、原遺跡、若宮台遺跡、高野谷戸遺跡、天神林遺跡などがあり、該期を探る良好な資料が数多く出土しており、今後も開発などによってより多くの資料を得ることが期待されよう。

奈良、平安時代になると集落の数は古墳時代後期にも増して増加する傾向にあり、集落は分布を見るとやや神流川沿岸を離れて、女堀川、身駒川流域に集中する傾向がみられる。背景には律令制度の浸透とともに新しい政治機構の中で政策と密接なかかわりがあったためと考えられ、周辺では中堀遺跡、若宮台遺跡のように綠釉陶器、灰釉陶器が出土する遺跡もある。一方、この時期（奈良時代）になると賀美郡でも寺院造営が着手され、五明寺が建立される。五明寺の出土瓦には上野国との関連を持つと見られる瓦が多く出土しており、古墳時代以降の上野国との関係を考える上で重要である。

また、周辺には天神社があり、『延喜式』神名帳に記載された賀美郡の四社（今城青八坂稻実神社、今木青坂稻実荒魂神社、今城青坂稻実池上神社、長幡部神社）のうちの一社（今城青坂稻実神社）として考えられている。

以上、当地域周辺には様々な遺跡が各期にわたって存在しており、從来から資料の豊富だった古墳時代後期以降の時期に加え、最近では縄文時代の資料も次第に増えている。また、古墳時代後期以降において自然堤防上から遺構や遺物が検出されるケースが増えていることは、今後神流川の相次ぐ氾濫によって埋没した古墳群等の存在を解明する課題とともに集落周辺に存在したと思われる生産基盤等を考える上にも重要な意味を持つものと言えよう。

註1 古墳時代前期の遺構は検出されなかったが、五領～和泉期の土器が少量出土している。

#### 引用参考文献

- 荒川 弘ほか（1981）「妻沼西南遺跡群」妻沼町埋蔵文化財調査報告書 第1集 埼玉県大里郡妻沼町教育委員会  
 梅沢太久夫ほか（1978）「原・清水南」上里町教育委員会  
 梅沢太久夫ほか（1978）「東谷・前山2号墳・古川端」埼玉県遺跡発掘調査報告書第16集 埼玉県教育委員会  
 梅沢太久夫ほか（1979）「下田・諏訪」埼玉県遺跡発掘調査報告書第21集 埼玉県教育委員会  
 駒宮史朗ほか（1979）「雷電下・飯玉東」埼玉県遺跡発掘調査報告書第22集 埼玉県教育委員会  
 中村倉司ほか（1979）「宇佐久保遺跡」埼玉県遺跡調査会報告書第38集 埼玉県遺跡調査会  
 中村倉司ほか（1980）「臺遺跡」埼玉県遺跡調査会報告書第41集 埼玉県遺跡調査会  
 宮崎朝雄ほか（1978）「中堀・耕安地・久城前」埼玉県遺跡発掘調査報告書第15集 埼玉県教育委員会

#### （遺跡周辺の主な古墳群）

- A 带刀古墳群 B 五明古墳群 C 四軒在古古墳群 D 元阿保古墳群 E 開口古墳群 F 植竹古墳群 G 北塚原古墳群 H 南塚原古墳群 I 二の宮古墳群 J 十二ヶ谷戸古墳群 K 城戸野古墳群 L 飯倉古墳群 M 長沖古墳群 N 秋山古墳群 O 広木大町古墳群 P 上宿古墳群 Q 後海道古墳群 R 白石古墳群 S 切通古墳群 T 天神山古墳群 U 諏訪山古墳群 V 将軍塚古墳群 W 塚本山古墳群 X 大久保山古墳群 Y 東提古墳群 Z 下野堂古墳群

### III 天神林遺跡

#### 1 調査の経過

昭和50年12月1日（晴）

発掘調査に先立ち現地踏査を実施する。

12月2日（晴）

鉄建公団関係者と現地実況視察、発掘区域について確認後、重機を使用して表土剥ぎ作業に入る。

12月15日（晴）

重機による表土剥ぎは本日で終了する。本日より発掘作業員を投入し本格的に調査を開始する。

12月18日（晴）

遺構（住居跡）を確認する。1～4号住居跡とし1・3号住居跡は掘り下げを始める。

12月24日（晴・強風）

4～5号住居跡を完掘する。ただちに写真撮影を実施する。

1月19日（晴・特に寒い）

ピット群完掘、礎石発見、8E-D区付近で焼土を検出する。

1月24日（晴）

7号住居跡のプランを確認する。造り方測量を継続する。

1月27日（晴）

発掘現場事務所下に住居跡が入りこんでいることが確認されたので、新しい地区（水田造成のため大きくカットされた地域）に移転するための盛土作業を実施する（重機使用）。

1月30日（晴）

掘立柱群（1号建物跡）を完掘する。

2月4日（晴）

住居跡3軒を確認する。8・9・10号住居跡とする。

2月20日（晴）

15・16号住居跡完掘、写真撮影を行う。

2月26日（晴）

18号住居跡の全景写真を完了し、道路東側部分の全調査を終了する。測量用造り方を設定する。

3月2日（曇）

道路西側の確認作業で5軒の住居跡プランを検出する。19号住居跡は掘り下げを開始する。

3月11日（晴）

22～24号住居跡の全景写真をすべて撮影する。

3月19日（晴）

発掘現場のすべての作業を終了する。事務所内を整理し、遺物を梱包する。

## 2 遺跡の概観

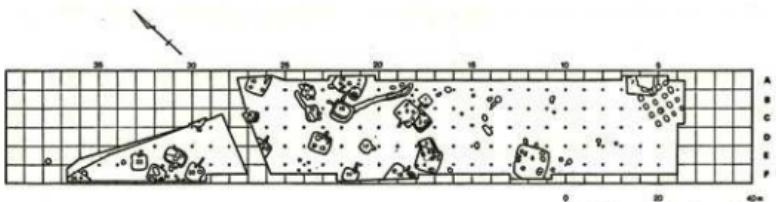
天神林遺跡は地形的には神流川氾濫原地形に立地する沖積地の遺跡である。標高は74.2~73.8mで北および東側に向かって緩やかに傾斜しているが景観的にはほぼ平坦地になっている。低位の地域はかつて河川の流れた痕跡であり、これらとの比高差をもつて高地に相当する。現地表の傾斜は遺跡立地當時と大差なかったようであり、住居跡床面のレベル傾向も同様になっていた。土層特徴は地表下70cmは灰色がかった褐色土で遺物はほとんど含まず、浮石粒がかなり認められる。その下部は20~50cmの黒褐色土で、ややチョコレート色がかり、遺構内の覆土と同じような土層である。厚さに差があり、低い方に向かって薄くなる傾向があった。この層は遺物をやや多く含んでいるが、住居跡の切り込みはこの層中に認められた。更に下層は黄褐色土になる。A-25区の北側では、黄褐色粘土質土が50cmあり、以下粘性がなくなりやや砂質に富む層が1.2mあった。以下は砂利層になる。地表下3mである。この層序は必ずしも一定ではないが、黄褐色粘土質土が確認面として明瞭で、これを切り込む遺構は明確なラインが検出できた。

発掘区は任意に設定した。まず上越新幹線の幅杭（大宮起点64.420km）の両点を結び（長さ22.90m）その中点から90°振って、直交する2本の直線を設定した。これを基準線として発掘地域内に4m方格のグリッドを設定した。縦軸（北東—南西）は磁北 N-40°46'30"Eである。国家座標については上越新幹線路線図（縮尺500分の1）の青図に基づいて図示したものである。縦、横軸にそれぞれ数字、アルファベットの名称をつけ、A-1区、B-1区のようにグリッド名称を設定した。

発見された遺構は住居跡24軒、建物遺構3棟、土壙25基、溝2本、柱穴列5、ピット群である。

住居跡は古墳時代後期後半（鬼高二期後半）に属するものである。ただし住居跡の切り合いがあり、更にその配置等から少くとも3時期の住居建造の段階があり、時期差がある。住居跡によっては時期比定の困難なものもあるが、出土遺物の量等から概ね鬼高二期後半をおおう時期とされる。住居形態、構造はやや差があり、カマドを全くもたないもの、小形でプランが不整なものがある。更にカマド構造についても両袖型と無袖型があり、その両方を持つ住居跡もある。カマド位置についても南壁方向を除いて他方向はすべてあり、かなり差があることがわかる。

建物跡は確実なものは3棟発見された。更にやや不確実であるが、柱穴列群中から想定できるも



第3図 天神林遺跡遺構配置図 (1/1200)

のもある。いずれも掘立柱の柱穴が検出されたものであるが、1号建物跡は特に大きな掘形（ホリカタ）をもち、地表下かなり深い柱穴が整然と並び、かなり整備された建物が想定できた。2号建物跡は当初ピット群と考えられたが、直交する軸線上にはほんどのピットがおさまることから建物跡が想定できたものである。ただし1号建物跡のような整然とした配置ではないので複数棟も考えられた。3号建物跡はやや不規則なピット配置であったが、竪穴住居とは別のものとして考えられたものである。以上の建物跡は時期決定の決め手になる遺物は出土していない。

建物跡の他に方向を同一にする柱穴列が5ヶ所ある。これらは各方向を同じくする2群に分かれ。建物跡としても十分可能性があるが、直交する軸の柱穴がやや不明瞭なので、柱穴列群としておいたものである。これらも時期の確認ができなかったが、柱穴列群の方向が異なっているので時期差があることは確実である。その他時期判定のできる遺物・状況はなかった。

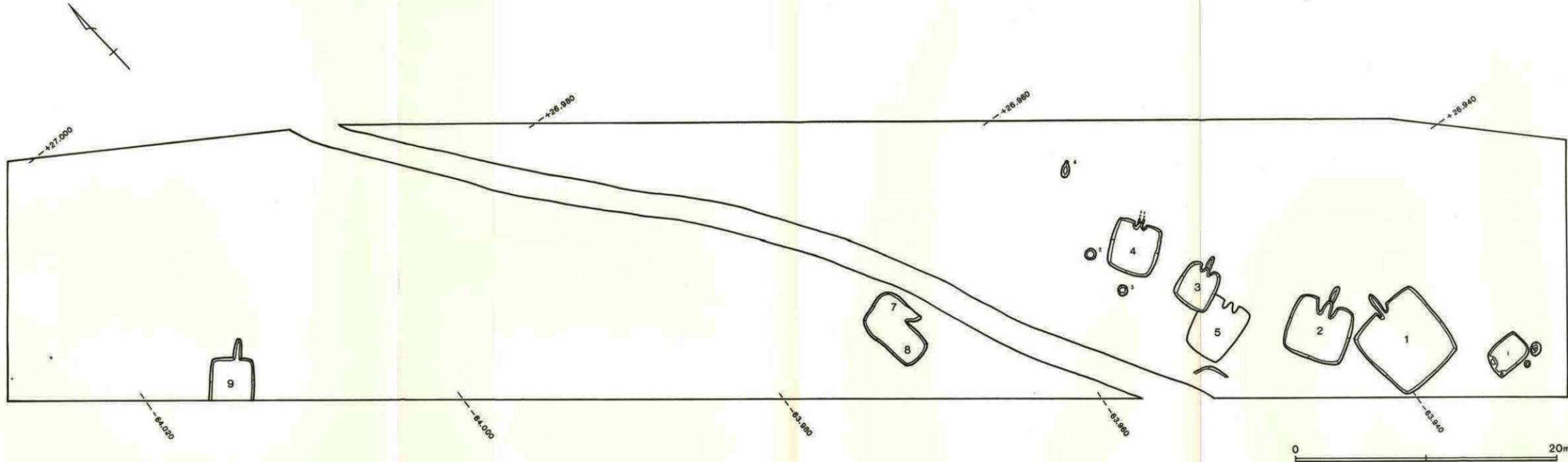
土壤については25基検出された。長方形、方形、円形土壤を主体とするもので、定型化した形態、構造をもつものが多い。その分布は群在する傾向があり、また長方形土壤に関しては東西、南北方向に集中する特徴もあり、地割に関係することも推察できる。遺物を含まず、人為的に埋められた層序区分を示すのが一般的であるが、住居跡を切る例があり、これらよりは新しくなるが、明確な時期比定は困難である。

溝については2本検出できた。ただし1号溝は西溝と東溝に分かれ、東溝は形態の特徴その他から西溝より古いことが予想された。2号溝は1号西溝と類似した覆土、形態をもち、同じ性格が推定できる。両者は結合していないが、方向的には直交するもので、その方位は東西、南北方向に近いので何らかの関連ある溝ということができる。なお溝中から土師器が出土しているが、これは溝によって切られている住居跡と同様な時期の遺物なので、直接関係はないものと思われる。

ピット群については、建物跡および柱穴列群周辺にあるものはそれらに伴うピットとしてよいであろう。その他柱穴列群北東に一群がある、これは径15~20cm、深さは確認面下10cm以下の浅いものがほとんどであった。柱穴列群とはやや離れている。特に列状になる様子は認められなかった。5号住居跡北側のピット群は住居跡内のものがこれら的一群となる可能性があり、住居跡の時代より新しいと思われる。22号住居跡東側の一群のピットは規模も大きく、他のものとは様相を異にする。2段に掘り込まれたものも存在する。住居跡を直接切ったものはないが、近接したものもあり住居跡とは直接関係ない新しい時期が推定できる。

その他D-8区と21号住居跡北西隅に焼土塊があった。径40cm程でわずかに皿状にくぼみ焼土があつたもので、カマドのように焼けた痕跡、特徴はない。時期判定の遺物は無く、性格は不明である。

出土遺物は住居跡出土のものがほとんどである長甕、壺、甕類、小形壺等があるが、長甕、壺が圧倒的に多い。その他須恵器の甕、壺、高杯、盤が発見されている。繩文土器（中期・後期）も数片あった。石製品としては滑石模造品（刻形品）白玉、砥石、繩文時代遺物として打製石斧が出土している。土製品としては土錐が一点発見された。

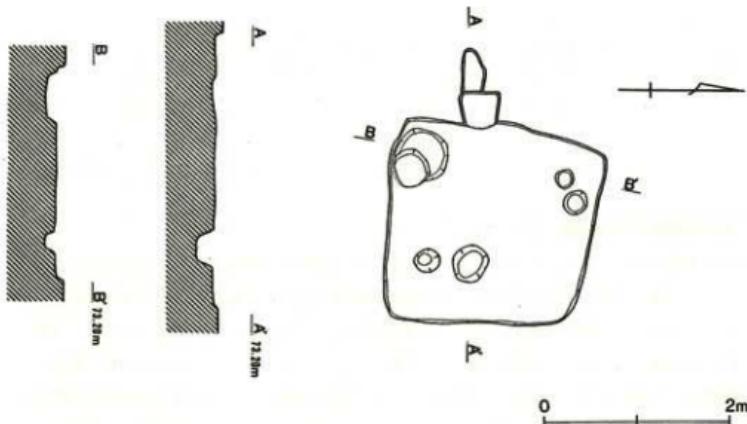


第73図 高野谷戸遺跡全体図 (1/200)

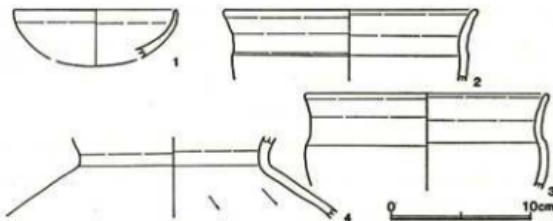
### 3 遺構と出土遺物

#### (1) 天神林遺跡 1号住居跡（第5図）

2.28m × 2.10m の台形プランを呈する。壁は 7cm 程度で、床面はやや固くしまる。柱穴状ピットは 4ヶ所であるが、位置、形状からは住居跡に伴う可能性はすぐない。周辺に小ピット群があるのでこれらとの関係が強いものと思われる。南西隅のものは貯蔵穴としてよいであろう。2段に掘り込み、最深部は床面下 23cm である。カマドは袖部の無いもので、幅 30cm、奥行 40cm の逆台形プランの燃焼部に更に 45cm の煙道がつく。両者ともに傾斜はすぐない。左側壁は煙道部まで、右側壁は燃焼部まで、更に底面は全体が焼けて赤褐色焼土が認められた。遺物は覆土中から甕、壺、鉢形土器の破片が出土している。



第5図 天神林遺跡 1号住居跡



第6図 天神林遺跡 1号住居跡出土遺物

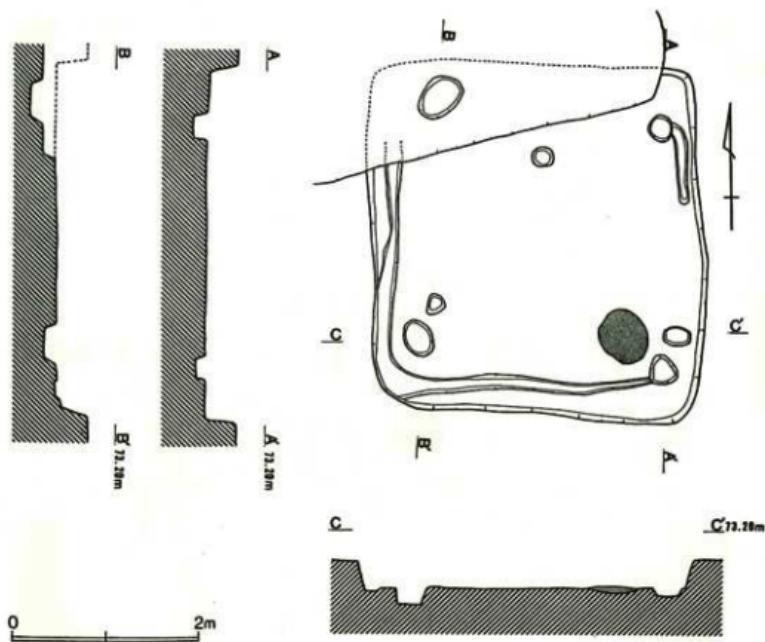
## 天神林遺跡 1号住居跡（第6図）

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	壺	口径(11.6)	口縁部は内湾ぎみに外傾する。体部はやや肥厚する。	全面に亘り、磨滅している。	A' + C + E 内外：茶褐色 1/5存 覆土
2	甕	口径(18.2)	口縁部は外反ぎみに直立し、外傾する。嘴部は丸い。胴部との境の段は緩い。	口縁部は内外面とも横ナデ。胴部内面はナデ（横ナデか？）、外面は磨滅している。	A + B + C + F 内：暗赤褐色 外：赤褐色 3/20存 覆土
3	鉢	口径(17.4)	内傾ぎみに緩やかに外反する。端部は丸い。胴部は僅かに張る。	全面に亘り、磨滅している。	A + A' + C + F 内外：淡茶褐色 1/5存 覆土
4	壺		口縁部は直立ぎみに立ち上がり、外反する。胴部は大きく膨らむ。	全面に亘り、磨滅している。	A + C + E 内外：赤褐色 1/5存 覆土

## (2) 天神林遺跡 2号住居跡（第7図）

3.8m × 3.6m の南北にやや長い方形プランである。壁は確認面下30cm内外で、全体的によく整った堅穴である。壁の内側や中央寄りにやや変則的な周溝が巡る。床面との比高は4cm前後で、幅は差があり、またかなり細い部分もある。一部は壁と接していたり、柱穴と結びついた部分もあり、通例の住居跡内周溝とはかなり形状を異にする。堅穴の拡張が考えられるがやや変則的な拡張である。北西部分に周溝と柱穴とが結合した部分があり、周溝が屈曲しているので当初は周溝で囲まれた部分の堅穴であったものを、更に周辺に拡張したものと思われる。ただし拡張までの期間については床面状況からは不明である。隣接の3号住居跡としたものと非常に類似した要素をもっているので周溝が内側に巡ることは堅穴の本来の要素であったかも知れない。

床面は概して良好な状態であった。柱穴は各隅部にあり、床面下10cm内外で一定している。北西隅は5号住居跡の覆土中で当初確認できなかったが、5号住居跡の床面精査で検出された柱穴でやや深い。なお5号住居跡の覆土中に2号住居跡のプランが確認されていたので、こちらの方が新しいことになる。隅部の柱穴近くに更に小ピットがあるが、これらも深さは大差ないので、柱穴の差しかえも考えられる。カマドは存在せず、南東隅に径50cmで床面を3cm掘りくぼめた地床炉がある。焼土上に若干の炭化物が認められたが、焼土は非常に薄い。遺物は床面付近から滑石臼玉の破片らしきものが1点出土している他は、土師器細片のみであった。以上の特に地床炉の存在と位置、不規則な壁溝等は通例の住居跡とは異なり、他の機能をも有する堅穴造構と思われる。



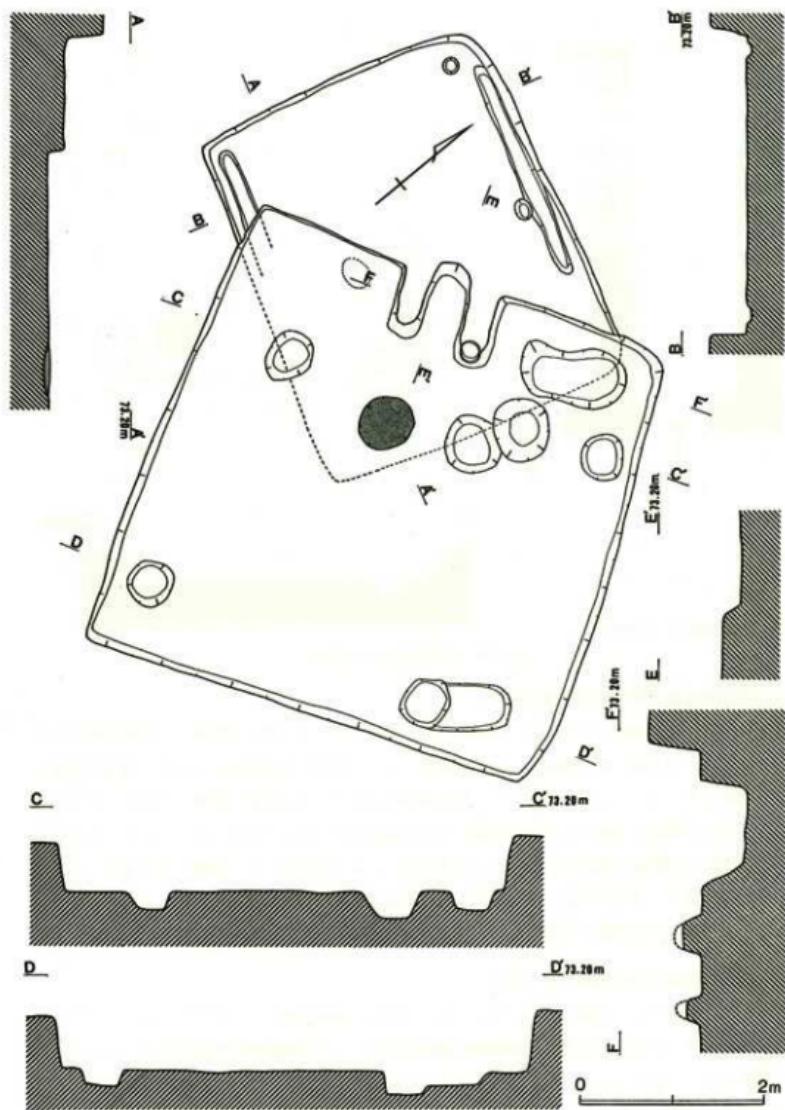
第7図 天神林遺跡2号住居跡

## (3) 天神林遺跡3号住居跡（第8図上）

これは4号住居跡の覆土中にプランが明確にあらわされていたもので、 $4.05m \times 3.05m$ の南北に長い長方形プランである。壁は40cmで、その内側やや隔てて周溝が東西部分のみ巡る。深さは床面から4cmであった。小ピットが2ヶ所あり、10~20cmの深さで、その規模、形態、位置からは主柱穴とはならない。床面は重複する4号住居跡より約30cm高いが、概して良好であった。カマFは存在せず、南東隅に径60cmの地床炉があった。若干の焼土、炭化物があった。遺物は全くなかった。以上の特徴は隣接する2号（住居）跡と形態、構造ともに非常に類似した要素をもっている。したがってこれも住居以外の機能をも有する堅穴造構である可能性が強い。

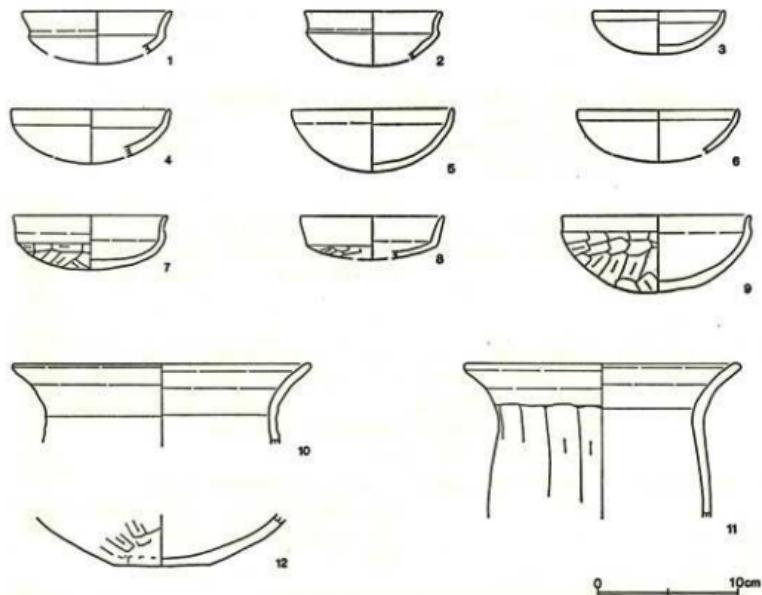
## (4) 天神林遺跡4号住居跡（第8図下）

北東辺の上面を3号住居跡に切られているが、 $5.3m \times 4.9m$ の整った方形プランを示す。ただし南壁側は地山層への切り込み状況が不明瞭な部分があり、ここは両隅部が検出されているので、これを結んだ推定ラインである。壁は約60cmで、この遺跡ではかなり深い。床面は良好な状態で、中央レベルがやや高い、主柱穴もほぼ整った位置にあるが、南東壁側の2本は床面下17~28cmで、他の2本とは異なりやや深くなっている。なおカマD右袖前方の2本の柱穴のうち主柱穴とされる



第8図 天神林遺跡3号(上)、4号(下)住居跡

ものは右側のピットと思われる。両者の新旧関係は不明であったが、位置深さから主柱穴と判断した。東壁隅寄りのピットは柱穴とは異なるものである。底面は平坦で柱穴とは異なるが、しっかりと掘られている。カマドは袖部に掘り残し黄褐色土が残り、右袖端部に長甕を倒立させて補強している。この内部につめた粘土中より滑石の白玉が検出された。左袖部については長甕等の補強材は認められなかった。カマド燃焼部は幅40cm、奥行80cmで火床の傾斜はすくない。両袖側は良く焼けていた。煙道部については3号住居跡に削平されて不明であった。カマド右側に不整長方形プランの貯蔵穴があり、深さは床面下50cm程度でかなり深い。遺物は多く、甕、長甕、壺が出土している。カマド左袖から50cm離れた壁際には15~20cm大の直方体形状の自然段7個の集中があり、その上に置くようにして环形土器が出土している。また南東壁際の北寄り部分には环形土器が伏せられて出土した例もある。



第9図 天神林遺跡4号住居跡出土遺物

## 天神林遺跡4号住居跡出土遺物（第9図）

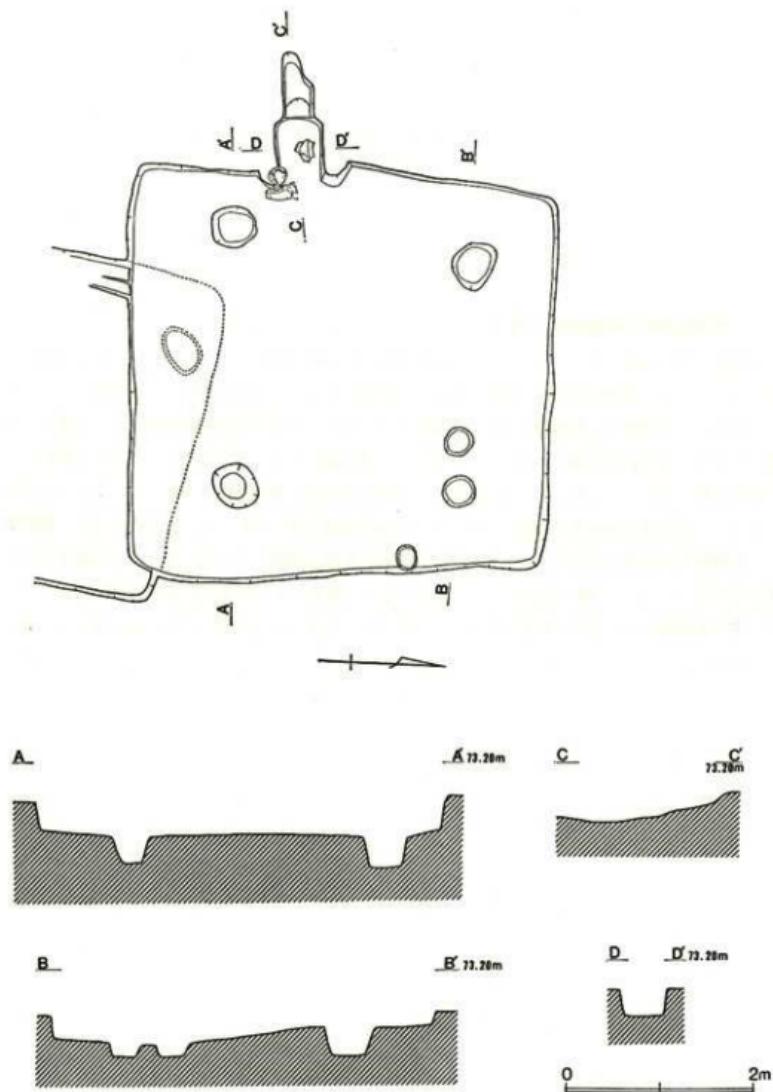
番号	品種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	壺	口径(10.7)	口縁部は外反する。端部は丸い。体部と境の稜は丸味を持つ。ナデは丁寧。	内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は磨滅している。	A' + E 内：灰黒褐色 外：淡茶褐色 3/20存 覆土

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
2	壺	口径(9.8)	口縁部は内傾ぎみに外反する。端部は丸い。稜は明瞭。	口縁部は内外面とも横ナデ。体部は内外面とも磨減している。器面の凹凸目立つ。	A+A'+E 内外:暗赤褐色 1/10存 カマド
3	壺	口径(9.3) 器高(3.1)	口縁部は内湾ぎみに外傾する。端部は外側に尖る。体部は丸味を持って底部へ移行する。底部の器内は厚い。	全面に亘り、磨減している為、整形手法不明瞭。	A+A'+E 内外:暗茶褐色 1/5存 床直
4	壺	口径(11.3)	口縁部は内湾ぎみに外傾する。端部は丸い。体部は丸味を持つ。	全面に亘り、磨減している為、整形手法不明瞭。	A+A'+E+F 内外:淡茶褐色 1/4存 覆土
5	壺	口径(11.6) 器高(4.5)	内湾ぎみに外傾する。端部は丸い。体部は丸味を持ち、突出する様な底部へ移行する。器高は高い。	全面に亘り、磨減及び凹凸が目立つ。	A+A'+E 内外:橙褐色～淡赤褐色 3/10存 カマド
6	壺	口径(11.6)	口縁部は短く、内湾ぎみに外傾する。端部は丸い。	内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は磨減しており、凹凸も目立つ。	A+E 内外:淡赤褐色 1/10存 覆土
7	壺	口径 10.9 器高 3.8	口縁部は内湾して立ち上がり、端部付近で外反する。端部は丸い。稜は緩い。体部は丸味を持ち、底部へ移行する。形態やや歪む。	内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は横、斜位のヘラケズリ。口縁部に未調整部を残す。底部の器内は厚い。	A'+B' 内外:淡赤褐色～茶褐色 9/10存 カマ F №1
8	壺	口径 10.3	口縁部は外傾し、端部は丸い。	内面から口縁部外面は横ナデ。体部は斜位のヘラケズリ。口縁部との境周辺は磨減している。	A'+E 内外:淡茶褐色～暗褐色 1/4存 覆土
9	壺	口径 13.6 器高 5.5	口縁部は短く、内傾ぎみに外反する。端部は丸い。体部との境の稜は明瞭で、丸味を持ち丸底の底部へ移行する。底部の器内は厚い。	内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は横、斜位のヘラケズス。下半部はやや難になる。底部は凹凸目立つ。	A+C+E+F 内外:淡赤褐色 9/10存 カマド内
10	甕	口径(21.2)	口縁部は大きく外反する。端部は丸い。胴部との境には低い段を持つ。	口縁部は内外面とも横ナデ。胴部は内外面とも磨減している。	A+C+F 内外:灰茶褐色 3/20存 カマド

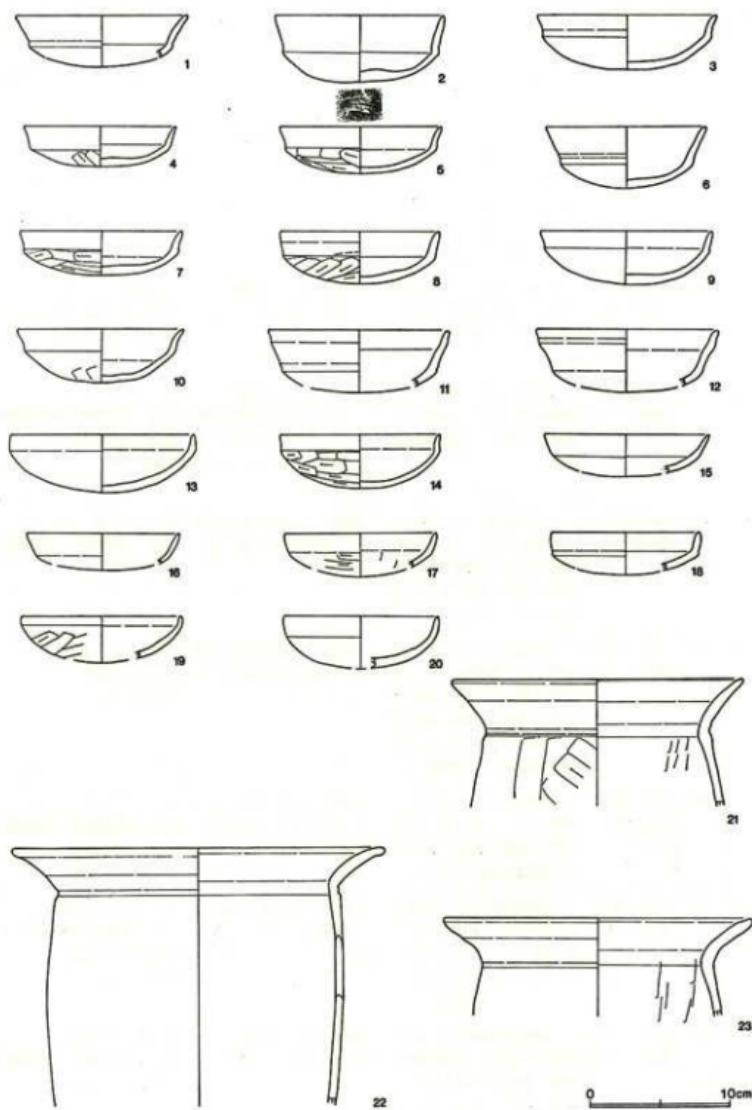
番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
11	甕	口径(19.7)	口縁部は外反し、外傾する。腹部は丸く、内側に浅い一本の沈線が這る。胴部は中位で張る。	全面に亘り、磨滅が著しい。口縁部は内外面とも横ナデ。胴部外面は縦位のヘラケズリ。	A+A'+B+C+E+F 内:灰褐色 外:明茶褐色 3/20存 カマド
12	甕	底径 6.8	平底である。腹部は大きく張って立ち上がる。	腹部下端は横位、他は斜位のヘラケズリ。内面は磨滅している。	A+B+C+D 内:淡黒褐色 外:暗褐色 1/5存 カマド周辺

## (5) 天神林遺跡 5号住居跡（第10図）

南側を2号住居跡によって切られているが4.5m×4.35mの台形プランで、北辺4.0m、南辺4.5mになっている。壁30~35cmで床面は焼土、炭化物がほぼ全面に認められた。部分的にレベル差があるが、これは焼土、炭化物を含む層の掘りすぎであり、床面下の掘形部分である。主柱穴は各隅寄りの4ヶ所で床面下20~30cmである。カマドは西壁側にある。袖部は壁よりわずかに突出し、長甕上半部を倒立させ、粘土をつめている。燃焼部は幅45cm、奥行55cmで方形プランをもち、更に一段上って煙道部が75cmまで確認できた。ともに両側壁は火熱を受けてレンガ状を呈する。燃焼部では長甕破片が出土していた。また入口では長甕の完形品が横転していた。その出土状況はカマド構造の一部ではなく、脇に置かれていたものである。遺物はかなり多い。長甕・壺が出土している。なお北東隅寄り主柱穴に隣接するピット内ではその覆土中に完形甕と長甕口縁が重なって出土していた。



第10図 天神林遺跡 5号住居跡



第11図 天神林遺跡5号住居跡出土遺物(1)

## 天神林遺跡 5 号住居跡出土遺物(1) (第11図)

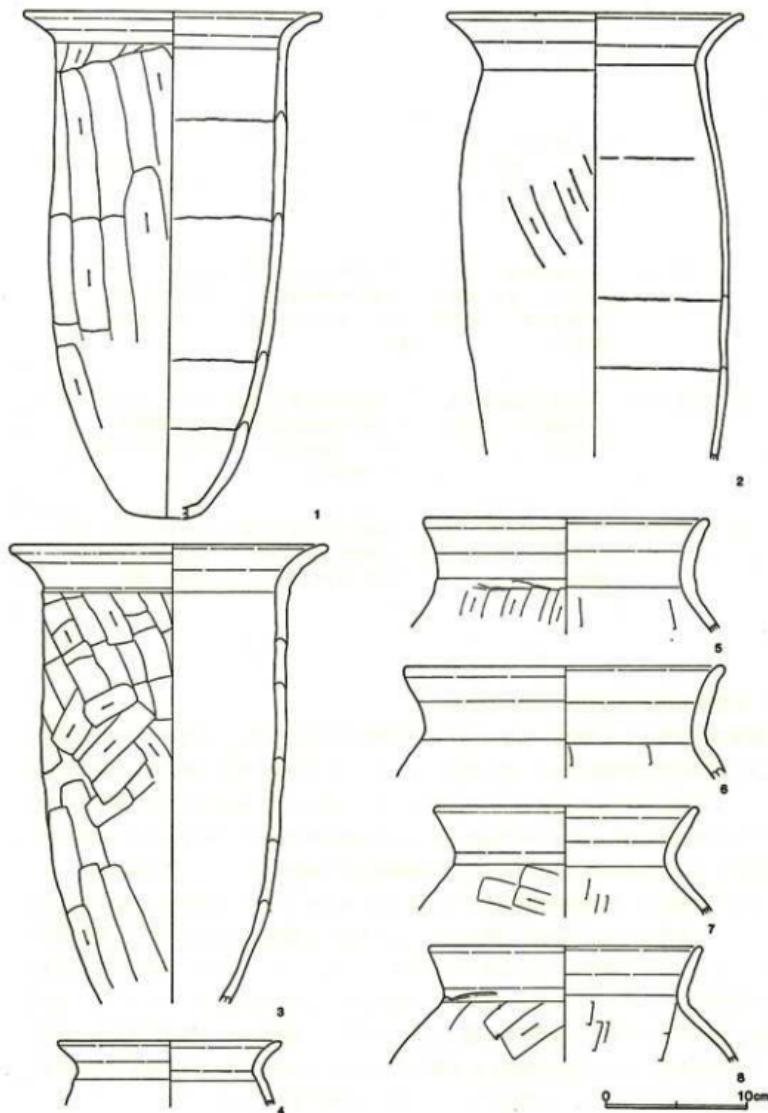
番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	壺	口径(12.4) 器高 4.0	口縁部は外反し、外傾する。端部は丸い。体部との境の稜は明瞭。	全面に亘り、磨滅している為、整形手法不明瞭。	A + A' 内外: 淡茶褐色～淡赤褐色 1/10存 床
2	壺	口径 12.2 器高 4.8	口縁部は緩やかに外反し中位から内湾ぎみに外傾する。端部は丸い。体部との境の稜は明瞭。体部は丸く、器内の厚い底部へ移行する。形態やや歪む。	全面に亘り、磨滅している為、整形手法不明瞭。底部は若干、上底ぎみでヘラ状工具による糸切り風の削り痕を残す。	A' + B + C + E 内外: 橙褐色 完存 床
3	壺	口径(12.9) 器高( 3.9)	口縁部は外反する。端部は丸い。稜は明瞭。体部は丸味を持って底部へ移行する。	全面に亘り、磨滅している。凹凸(体部外面)目立つ。	A' + B 内外: 淡赤褐色 1/2存 カマ F内
4	壺	口径(10.8) 器高( 2.9)	口縁部は細く、外傾する。端部は鋭く尖る。体部との境の稜は緩い。底部の器内は厚い。	全面に亘り、磨滅している。僅かに体部外面に斜位のヘラケズリを確認できる。底部は外面とも未調整部分残す。	A + A' + E 内外: 暗茶褐色～暗赤褐色 底部: 灰黒褐色 1/4存 床
5	壺	口径(11.7) 器高( 3.4)	口縁部は緩やかに外反する。端部は丸い。体部と境の稜は緩い。体部は丸味を持ち、底部へ移行する。器内は一定している。	内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は横、斜位のヘラケズリ。	A' + C + E 内外: 淡茶褐色～赤褐色 1/2存 床
6	壺	口径 11.5 器高 4.3	口縁部はやや外反ぎみに外傾する。端部は丸い。口縁部下端には二本の沈線が巡る。体部との境の稜は緩い。体部は丸味を持って底部へ移行する。形態整う。	内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は磨滅している。	A + A' + C + E 内外: 赤褐色 7/10存 床
7	壺	口径 11.8 器高 (3.2)	口縁部は短く、外反する。端部は丸い。稜は低く丸味を持ち体部、底部へ移行する。底部の器内は厚い。	内面から口縁部外面にかけては横ナデ。外面は横、斜位のヘラケズリ。	A' + B' + E 内外: 暗茶褐色～淡赤褐色 ～赤褐色 3/5存 床 №5
8	壺	口径 11.5 器高 3.7	口縁部は肥厚し、内湾ぎみに外傾する。端部は丸い。稜は緩やか。体部から底部は丸味を持つ。器内は一定している。口縁部歪む。	内面から口縁部外面にかけては横ナデ。体部外面は斜位のヘラケズリ。	A' + B' + D + E 内外: 茶褐色～暗褐色 底部: 淡黒灰色 7/10存 床
9	壺	口径 12.4 器高 3.9	口縁部は外傾する。端部は丸い。体部との境の稜は明瞭。体部は丸味を持ち、底部へ移行する。底部の器内は厚く、調整丁寧。	全面に亘り、磨滅している為、整形手法不明瞭。	A + A' + C + E 内外: 暗赤褐色～淡茶褐色 7/20存 覆土

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
10	壺	口径(12.0) 器高(3.8)	口縁部は外反する。端部は丸い。体部との境の稜は緩やかで、丸味を持って体部、底部へ移行する。形態やや歪む。	内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は磨滅している箇所が多い。下半は斜位のヘラケズリ。	A' + B + C 内外: 淡赤褐色～淡茶褐色 1/2存
11	壺	口径(13.0)	口縁部は外反して立ち上がり、中位から内湾ぎみに外傾する。端部は丸く、若干外側に屈曲する。また、下端には一本の浅い沈線が巡る。稜は緩いが明瞭。	内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は磨滅している。	B' + D 内外: 赤褐色～茶赤褐色 2/5存 床直
12	壺	口径(13.1) 器高(4.5)	口縁部は外反し、中位から内湾ぎみに外傾し、端部は丸く外側に屈曲する。体部との境の稜は緩やか。	内面から口径部外面は横ナデ。体部外面は磨滅している。	A + E + C 内外: 赤褐色 口縁の一部: 明褐色 3/10存 覆土上層
13	壺	口径 13.5 器高(4.1)	口縁部は短く、内湾する。端部は丸い。体部は丸味を持ち底部へ移行する。	全面に亘り、磨滅している為、整形手法不明瞭。	A + E 内外: 赤褐色～淡赤褐色 2/5存 覆土下層
14	壺	口径 11.6 器高(3.8)	口縁部は内傾ぎみに外反する。端部は丸い。体部との境の稜は明瞭。体部は丸味を持ち底部へ移行する。形態整う。	内面から口縁部外面にかけては横ナデ。体部外面は横位のヘラケズリ。口縁部に未調整部を残す。	A' + F 内外: 淡赤褐色～褐色 2/5存
15	壺	口径(11.8)	口縁部は外傾する。端部は細く尖る。	全面に亘り、磨滅している。	A + A' + F 内: 淡赤褐色 外: 暗灰茶褐色 1/10存
16	壺	口径(11.2)	内湾ぎみに外反する。端部は丸い。	口縁部は内外面とも横ナデ。	A' + E 内: 暗赤褐色 外: 灰黒褐色 1/10存 覆土下層
17	壺	口径(11.0)	内湾ぎみに外傾する。端部は丸い。	脣部外面は横位のヘラケズリ。内面は部分的にヘラ状工具の痕跡を残す。口縁部は内外面とも横ナデ。	A + A' + D 内外: 暗茶褐色 3/20存 床
18	壺	口径(10.9)	口縁部は内湾ぎみに外傾する。端部は丸い。体部との境の稜は緩やかである。	全面に亘り、磨滅している為、整形手法不明瞭。	A + A' + E 内外: 淡茶褐色 1/5存 床

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
19	壺	口径(11.3)	口縁部は短く、内湾する。体部は丸味を持つ。	全面に亘り、磨滅している為、整形手法不明瞭。器面に凹凸目立つ。	A+E+F 内:明茶褐色 外:黒褐色 2/5存 穢土
20	壺	口径(11.1)	口縁部と体部の境がやや不明瞭である。内湾ぎみに外傾し、端部はやや尖る。体部から底部は器内が厚くなる。	内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は磨滅している。外面とも一部を除いて黒色塗されている。器面の凹凸目立つ。	A'+E 内外:黒褐色~明黒褐色 2/5存 床底
21	甕	口径(21.0)	口縁部は大きく外反する。端部は丸く、内側に一本の沈線が巡る。胴部との境の稜は緩やかだが明瞭。胴部は張る。	口縁部は内外面とも横ナデ。胴部外面は斜位のヘラケズリ。内面は横位のヘラナデ。残存する胴部下半は若干、磨滅している。	A+B+C+E+F 内:暗茶褐色~淡橙褐色 外:淡赤褐色 1/5存 カマド内
22	甕	口径(26.8)	口縁部は大きく外反する。端部は丸く、下端部には二本の浅い沈線が巡る。胴部との境の稜は明瞭。胴部は僅かに張る。輪積痕明瞭。	口縁部内外面の横ナデを除いて他の磨滅している。	A+B+C+E+F 内:茶褐色 外:暗茶褐色 1/5存 カマド内
23	甕	口径(22.2)	口縁部は肥厚して、外傾する。端部は丸く、胴部は張る。調整は丁寧。	口縁部は内外面とも横ナデ。胴部内面は横位のヘラナデ。	A+A'+C+E+F 内:暗褐色 外:暗茶褐色~黒褐色 1/5存 カマFNo1

天神林遺跡 5号住居跡出土遺物(2) (第12図)

番号	器種	大きさ(No.)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	甕	口径 21.2 器高 36.2	口縁部は大きく外反する。端部は丸い。胴部は僅かに丸味をもち、底部へ移行する。輪積痕明瞭。	口縁部は内外面とも横ナデ。胴部外面は斜、縦位のヘラケズリ。下半部及び内面は磨滅の為、整形痕不明瞭。	A+A'+C+E+F 内:淡赤褐色 外:暗示褐色 3/5存 No.3
2	甕	口径 21.2	口縁部は長く、大きく外反する。端部は丸い。胴部は僅かに張る。下半部の輪積痕は明瞭。形態やや歪む。	全面に亘り、磨滅している。体部外面は斜位のヘラケズリと思われる。器面の凹凸目立つ。	A+A'+F 淡赤褐色~黒褐色~暗赤褐色 内:淡茶灰色~淡黒灰色 1/2存 カマ FNo.3
3	甕	口径 22.7	口縁部は外傾し、外反する。端部は丸い。中位には一本の浅い沈線が巡る。胴部との境には低い段を持ち、内湾ぎみに底部へ移行する	口縁部内外面は横ナデ。胴部外面は斜、縦位のヘラケズリ。部分的に磨滅している。内面は磨滅の為、整形痕不明瞭。	A+B'+F 内:淡茶褐色 外:暗褐色 4/5存 カマ FNo.3

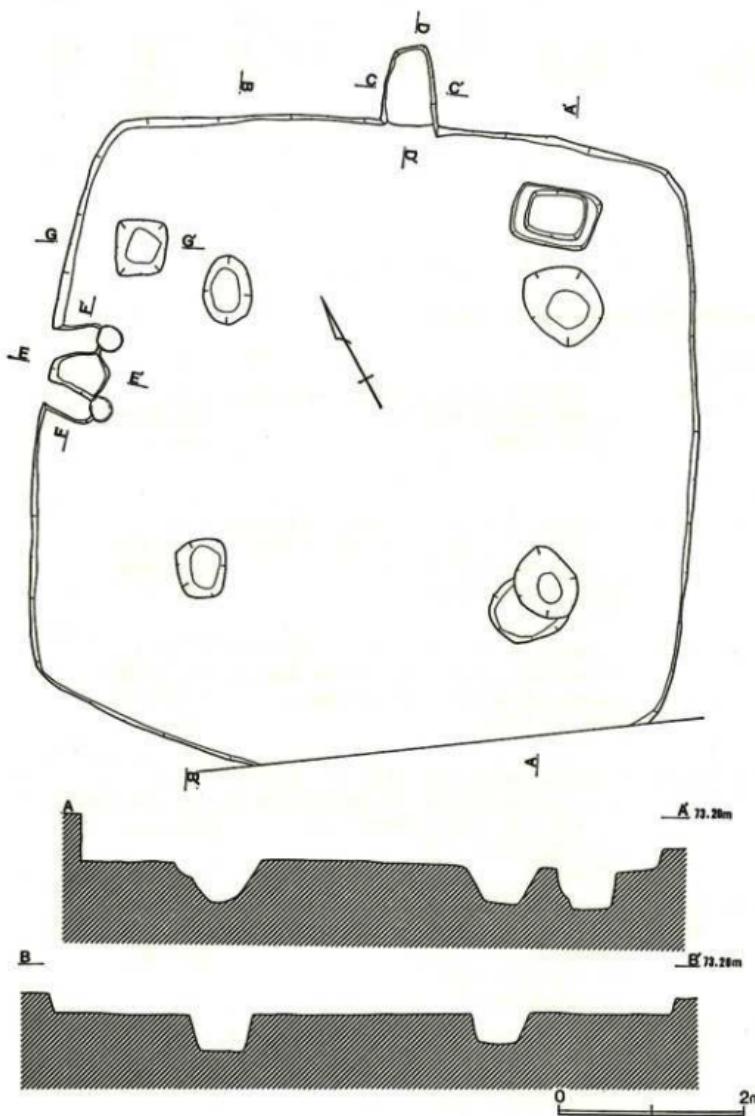


第12図 天神林遺跡5号住居跡出土遺物(2)

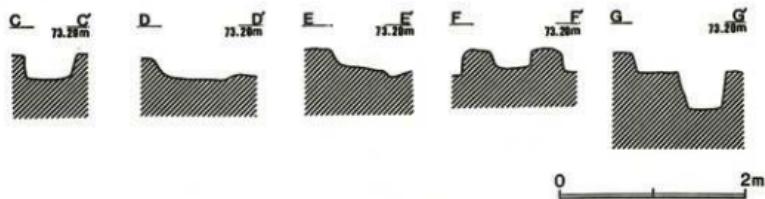
番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
4	甕	口径(15.9)	口縁部は外反する。胸部との境には緩やかな段をもつ。胸部は張る。	口縁部は内外面とも横ナデ。	A+A'+B+C 内:灰褐色 外:茶褐色 1/5存 库直
5	壺	口径(20.4)	口縁部は肥厚し、緩やかに外反する。端部は丸い。胸部との境の段は低いが明瞭。胸部は大きく膨らむ。	口縁部は内外面とも横ナデ。胸部外面は横位のヘラケズリ。内面は横位のヘラナデ。	A'+B+C+E+F 内外:淡茶褐色~暗茶褐色 1/5存 カマF №2
6	壺	口径 22.9	口縁部は直線的に外傾し端部は丸く、外側に屈曲する。胸部は張る。口縁部の形態歪む。	口縁部は内外面とも横ナデ。胸部外面は斜位のヘラナデ。口縁部に未調整部を残す。	A+B+C+E 内外:淡赤褐色 3/10存 覆土№3
7	壺	口径(23.0)	口縁部は直線的に外傾する。端部は丸い。胸部は大きく膨らむ。	口縁部は内外面とも横ナデ。胸部外面は斜位のヘラケズリ。内面は横位のヘラナデ。磨滅進む。	A+B+C+E 内外:橙褐色 1/5存 ピット内№8
8	壺	口径(19.6)	口縁部は外傾する。端部は外側に丸い。胸部は大きく膨らむ。	口縁部は内外面とも横ナデ。胸部外面は斜位のヘラケズリ。内面は横位のヘラナデ。	A+A'+B+C+F 内外:淡赤褐色 3/10存 覆土

## (6) 天神林遺跡 6号住居跡 (第13、14図)

発掘住居跡中では最大であり、7.05m×7.0mの方形プランを呈する。南壁がややふくらんでいるがこの部分はやや不明確である。他の壁はしっかりとおり25cmの高さであった。床面もしっかりしたもので住居プランの対角線上に大きな柱穴がある。床面下35~40cmであった。形態構造の異なるカマドが壁面を異にして2ヶ所に設置されていた。北西壁のカマド(№1)は「ハ」の字に開く、粘土袖をもち、左右袖端部に長甕を倒立させて補強材とする構造をもつ。この焚口幅は50cmであった。燃焼部は幅45cm、奥行55cmで傾斜をもち、煙道部に連なるが、ここは天井部と同様に確認されなかった。北東壁のカマド(№2)は№1カマドとは異なり、袖部をもたないもので、燃焼部が台形プランを呈し壁外に切り込まれ、底面の傾斜がほとんどなく、更に先端部が急傾斜をもって立ち上がる特徴をもつ、そして内面全体が非常によく焼けており、特に側面壁はレンガ状になっていた。幅55cm、奥行85cmでかなり大規模な良く整ったカマドである。前面の床には焼土、炭化物がすくなく、また遺物が無いので、住居廃棄時には使用していなかったものと思われる。№1、№2のカマドの右隅それぞれ長方形プランの貯蔵穴をもつ。整った形態で底面も長方形で平坦である、深さは床面より40~45cmであるが、№2カマドの右側のものは2重底で蓋をされていた可能性がある。



第13圖 天神林遺跡 6號住居跡(1)



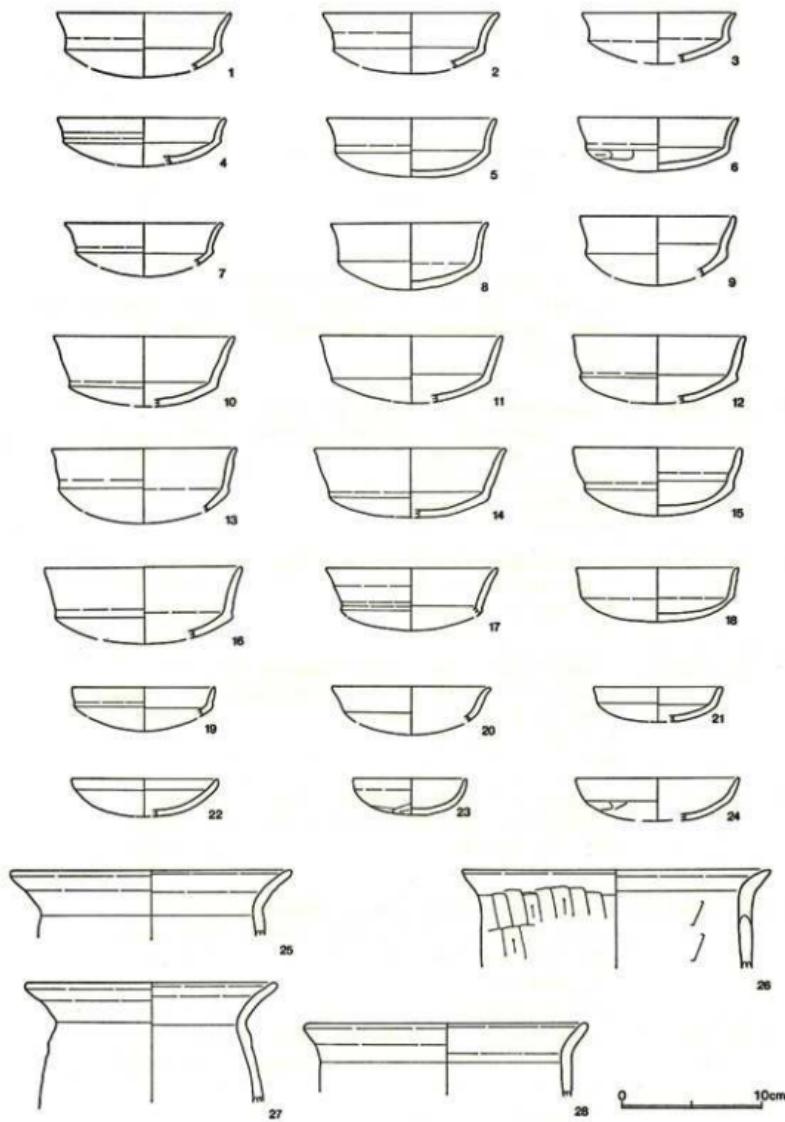
第14図 天神林遺跡 6号住居跡(2)

遺物は床面上に多く出土しているが、特にNo 1 カマドの左側と、焚口部分、更にその前面の床に多く散乱していた。長甕、大小の甕、壺が主体であるが、特に壺の量が多い。

## 天神林遺跡 6号住居跡出土遺物(1) (第15図)

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	壺	口径(12.3)	口縁部は大きく外反する。端部は鋭く尖る。体部との境の稜は明瞭。	内面から口縁部外面は横ナデ。	A+A' 内外: 淡橙色 1/5存 床
2	壺	口径(12.6)	口縁部は大きく外反する。端部は丸い。下端には一本の浅い沈線が巡る。体部との境には緩やかな稜を持つ。	内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は磨滅している。	A'+E 内: 淡赤褐色 外: 淡茶褐色 1/4存 床
3	壺	口径(10.9)	口縁部は大きく外反する。端部は鋭く尖る。体部との境には鋭い稜を持つ。体部は丸味を持つ。	内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は磨滅の為、整形手法不明瞭。	A+A'+E 内外: 淡赤褐色 底部: 橙黒褐色 3/10存 床
4	壺	口径(11.9)	口縁部は下半に低い段を持ち、外反する。端部は丸い。体部との境に稜を持つ。体部は丸味をもち、底部へ移行する。	全面に亘り、磨滅している為、整形手法不明瞭。器面の凹凸目立つ。	A'+E 内外: 茶褐色～淡茶褐色 1/2存 覆土
5	壺	口径 12.1 器高 4.3	口縁部は緩やかに外反する。端部は丸い。体部との境は丸味を帯び、体部から丸底の底部へ移行する。形態やや歪む。	全面に亘り、磨滅しており、整形手法不明瞭。	A+A'+C+E 内外: 橙褐色～淡赤褐色 4/5存 覆土
6	壺	口径 11.3 器高 3.9	口縁部は外反する。端部は丸い。体部との境に丸みをもった稜を持ち、体部から底部へ移行する。形態やや歪む。	内面から口縁部外面にかけては横ナデ。体部外面は横位のヘラケズリ。	A'+C 内外: 橙褐色 9/10存 覆土

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
7	壺	口径 11.3	口縁部は大きく外反する。端部は丸い。体部と境の稜は明瞭。	全面に亘り、磨滅している。	A+A'+E 内: 淡橙褐色 外: 淡赤褐色 1/10存 覆土下層
8	壺	口径(11.2) 器高(4.8)	口縁部は緩やかに外反する。端部は細い丸い。体部との境の稜は丸味をもち、深く丸い底部へ移行する。器高は高い。	内面から口縁部外面にかけては横ナデ。体部外面は磨滅している。	A+A'+E 内外: 淡茶褐色~暗赤褐色 2/5存 床
9	壺	口径 10.9	口縁部は外反し、内湾ぎみに外傾する。端部は内側に丸い。体部との境の稜は高い丸味をもつ。	内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は磨滅している。器面の凹面目立つ。	A'+E 内外: 淡赤褐色~暗赤褐色 1/10存 床
10	壺	口径(12.6)	口縁部は外反ぎみに立ち上がり、中位で低い段をもって内湾後、外傾する。端部は細く尖る。体部との境に緩やかな稜を持つ、浅い底部へ移行する。	全面に亘り、磨滅している為、整形手法不明瞭。	A'+C 内外: 暗茶褐色 3/10存 覆土
11	壺	口径(13.1)	口縁部は直線的に外傾する。端部は細く尖り気味。体部との境に緩やかな稜をもつ。	全面に亘り、磨滅している。	A+A'+C 内: 淡茶褐色 外: 稲褐色 3/10存 床
12	壺	口径(12.2)	口縁部は内湾ぎみに外傾し、端部は外反する。体部との境に緩やかな稜をもつ。体部は丸味をもち、底部へ移行する。	内面から口縁部外面にかけては横ナデ。体部外面は磨滅している。	A'+E 内外: 淡赤褐色 2/5存 覆土
13	壺	口径(13.3)	口縁部は内湾ぎみに外傾し、端部は外反し、丸い。体部との境の稜は丸味をもって体部へ移行する。	全面に亘り、磨滅している為、整形手法不明瞭。	A'+E+F 内: 淡茶褐色 外: 淡灰黒色 1/10存 貯藏穴
14	壺	口径(13.6)	口縁部は内湾ぎみに外傾し、端部は外反し、丸い。体部との境には緩やかな稜を持つ。体部は丸味をもって底部へ移行する。	内面から口縁部外面にかけては横ナデ。体部外面は磨滅している。	A'+C 内外: 淡茶褐色 2/5存 覆土
15	壺	口径 12.1 器高 5.0	口縁部は外反して立ち上がり、中位から内湾ぎみに外傾する。端部は丸い。体部との境に緩やかな稜を持つ。体部から底部は丸味をもつ。	全面に亘り、磨滅している為、整形手法不明瞭。	A+A'+C+E 内外: 淡赤褐色~灰赤褐色 3/5存 床



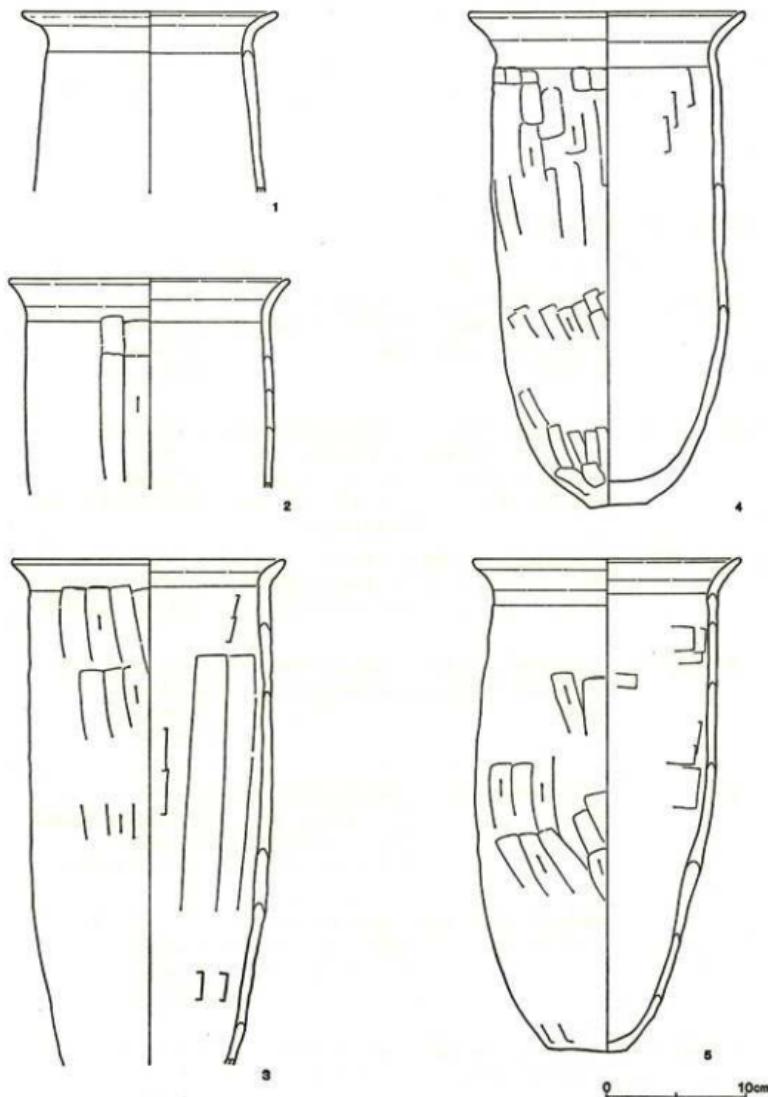
第15図 天神林遺跡 6号住居跡出土遺物(1)

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
16	壺	口径(14.1)	口縁部は緩やかに外反する。端部は丸い。体部との境に鋭い稜を持ち、その上に二本の浅い沈線が巡る。	口縁部は内外面とも横ナデ。体部は内外面とも磨滅している。	A' + E + C 内外: 淡茶褐色 2/3, 存 床
17	壺	口径(12.3)	口縁部は緩やかに外反し端部は丸い。体部との境の緩やかな稜の上には二本の浅い沈線が巡る。	口縁部は内外面とも横ナデ。	A' + C 内外: 淡赤褐色 1/10存 床
18	壺	口径(11.4) 器高 (3.8)	口縁部は内湾ぎみに外傾し、端部は外反し、丸い。体部との境に緩やかな稜をもち稜の上に沈線が一本巡る。底部の器内はやや厚い。	内面から口縁部外面にかけては横ナデ。体部外面は磨滅している。	A + A' + E 内外: 淡茶褐色 2/5存 床
19	壺	口径(10.2)	口縁部は短く内湾ぎみに外傾する。体部との境の後は緩やかである。	全面に亘り、磨滅している。	A' + E 内外: 淡赤褐色 3/20存 覆土
20	壺	口径(11.2)	口縁部は大きく外反する。端部は丸い。	全面に亘り、磨滅している。	A + A' + E 内外: 淡茶褐色 1/10存 床
21	壺	口径 (9.3)	口縁部は短く、外反する。端部は丸い。体部から底部は丸味を持つ。	内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は磨滅している。器面の凹凸目立つ。	A' + E 内外: 暗茶褐色 3/20存 覆土
22	壺	口径(10.5)	口縁部は短く、内湾する。端部は丸い。体部から底部は丸味を持って移行する。	全面に亘り、磨滅している。鉱物粒の付着著しい。	A + A' + E + F 内: 明赤褐色 外: 赤褐色 1/4存 床
23	壺	口径 (8.3) 器高 (2.5)	口縁部は内湾して外傾する。端部は磨滅し、丸い。体部は丸味を持ち、底部へ移行する。	内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は上半部が磨滅している。下半部横、斜位のヘラケズリ。体部に未調整部を残す。	A' + F 内外: 淡茶褐色 3/10存 床
24	壺	口径(11.7)	口縁部は外傾する。端部は丸い。	内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は横位のヘラケズリ。内外面とも磨滅が目立つ。	A' + C 内: 淡茶褐色 外: 暗茶褐色 2/5存 覆土

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
25	甕	口径 20.0	口縁部は大きく外反する。端部は丸い。胴部は僅かに張る。	全面に亘り、磨滅している。	A+A'+B+E+F 内: 淡橙褐色 外: 赤褐色 3/10存 床
26	甕	口径(22.0)	口縁部は大きく外反する。端部は細く尖る。胴部は直線的である。	口縁部は内外面とも横ナデ、胸部外面は縦位のヘラケズリで口縁部まで及ぶ。内面は磨滅ぎみで横位のヘラナデ。	A+A'+C+E+F 内外: 淡赤褐色 1/5存 床
27	甕	口径(18.0)	口縁部は大きく外反する。端部は丸い。胴部は張る。	口縁部は内外面とも横ナデ。体部は内外面とも磨滅している。	A+C+F 内外: 淡橙色 1/5存 床
28	甕	口径(20.2)	口縁部は外反する。端部は丸い。胴部は直線的である。	全面に亘り、磨滅している。	A+A'+C+F 内外: 淡橙褐色 1/10存 床

## 天神林遺跡 6 号住居跡出土遺物(2) (第16図)

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	甕	口径(18.1)	口縁部は大きく外反する。端部は丸い。胴部は直線的に開く。	口縁部は内外面とも横ナデされるが、他の部分は磨滅している。	A+A'+B+C+F 内外: 淡橙褐色～茶褐色 1/5存 床
2	甕	口径(20.0)	口縁部は外反する。端部は丸い。	口縁部は内外面とも横ナデ、胸部外面は縦位のヘラケズリ。内面はナデ。	A+A'+B+C+F 内: 灰褐色 外: 喀赤褐色 1/5存 床 炭化物付着
3	甕	口径 19.5	口縁部は短く、外反する。端部は細くなり、丸い。胴部は直線的で、次第に内湾する。輪積痕明顯。	胴部外面は縦位のヘラケズリ。内面は横、縦位のヘラナデ。口縁部を含め、殆ど磨滅している。	A+A'+E+F 内外: 暗茶褐色～暗赤褐色 胴部: 灰黒色 3/5存 床直
4	甕	口径 19.6 底径 4.0 器高 35.2	口縁部は大きく外反する。端部は丸い。胴部は下半でやや内湾して平底の底部へ移行する。輪積痕明顯。形態整う。	口縁部は内外面とも横ナデ。胸部外面は縦、斜位のヘラケズリ。内面は横位のヘラナデ。内外面とも若干磨滅している。底部ヘラケズリ。	A+A'+E+F 内外: 暗赤褐色～淡茶褐色 4/5存 床

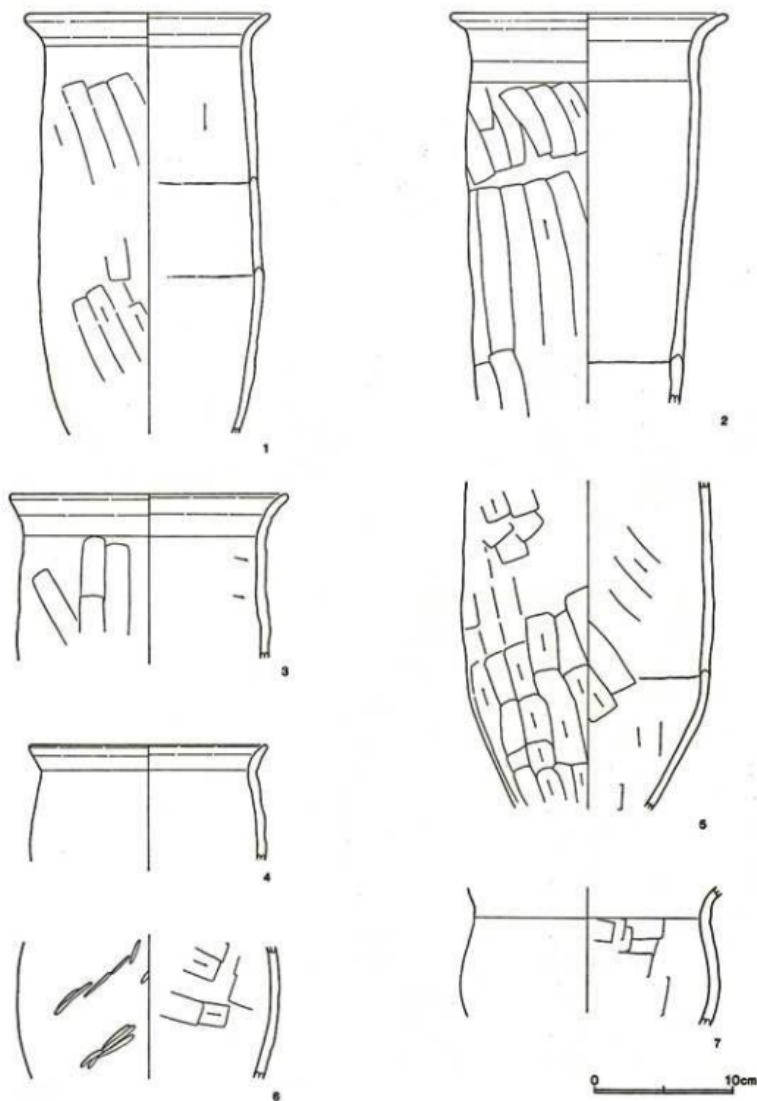


第16図 天神林遺跡 6号住居跡出土遺物(2)

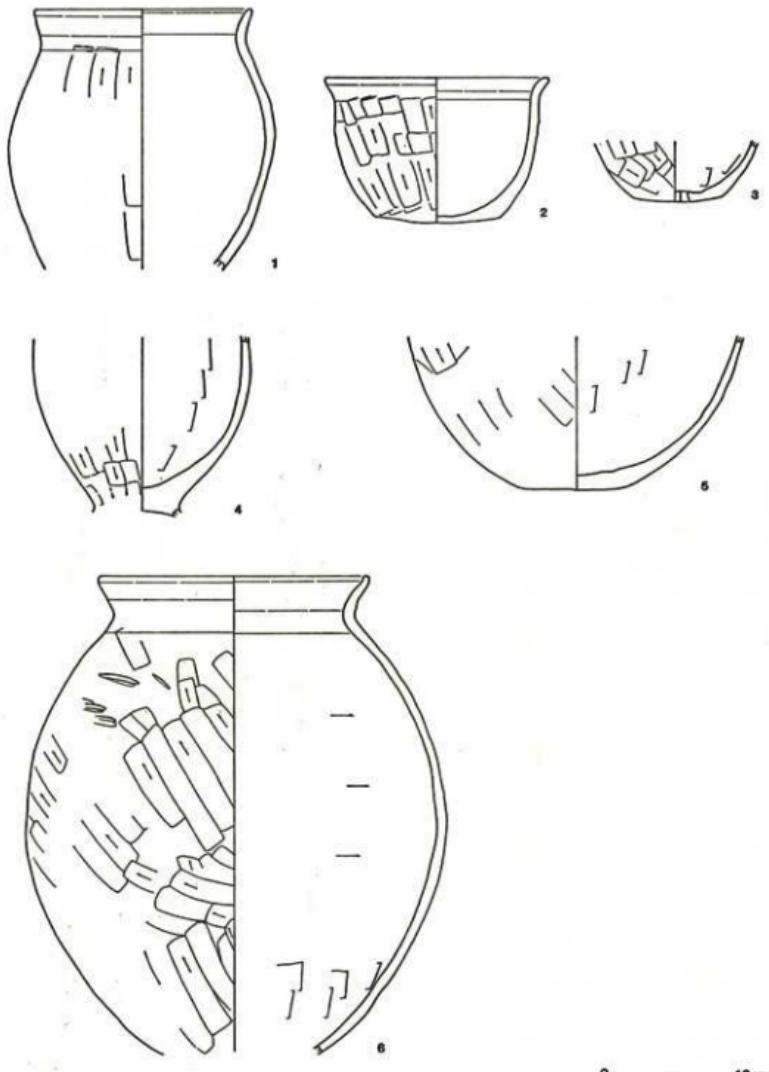
番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
5	甕	口径 19.1 器高 35.2	口縁部は外反する。端部は丸い。胸部は中位で張り、内湾ぎみに底部へ移行する。形態やや重む。底部は上底気味。	口縁部は内外面とも横ナデ。胸部外面は縦、斜位のヘラケズリ、内面は横位のヘラナデ。磨滅目立つ。胸部内外面に未調整部を多く残す。	A+A'+E 内:赤褐色～灰黒色 外:暗赤褐色 9/10存 カマド左床直

天神林遺跡 6号住居跡出土遺物(3)(第17図)

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	甕	口径 17.6	口縁部は外反する。端部は磨滅し、丸い。胸部は下半で僅かに張る。輪積痕明瞭。形態整う。	胸部は縦位のヘラケズリ 口縁部内外面、胸部内面は磨滅している。	A+A'+E+F 内:暗赤褐色 外:茶暗褐色 4/5存 №1カマド
2	甕	口径 20.0	口縁部は大きく外反する。端部は丸い。胸部は直線的で、次第に内傾する。輪積痕明瞭(一部)	口縁部は内外面とも横ナデ。胸部は縦位、斜位のヘラケズリ。内面は磨滅している。整形やや難、胸部に未調整部を残す。	A+B+E+F 内:茶褐色 外:暗赤褐色 7/10存 №1カマド右袖
3	甕	口径(20.0)	口縁部は外反する。端部は丸い。胸部は僅かに張る。	全面に亘り、磨滅が目立つ。胸部外面は縦位のヘラケズリが施される。	A'+B+C+E 内:淡赤褐色～灰褐色 1/5存 床 鉱物粒付着
4	甕	口径(17.1)	口縁部は短く、外反する。端部は丸い。胸部は下半で張る。	全面に亘り、磨滅している為、整形手法不明瞭。	A+A'+C+D+F 内:淡茶褐色 外:暗赤褐色 1/5存 床
5	甕		胸部は直線的で下半で内湾する。	胸部外反は縦位のヘラケズリ。内面は斜、横位のヘラナデ。上半部は磨滅している。器面は凹凸目立つ。	A+B+C+E+F 内:暗赤褐色～淡赤褐色 外:淡暗褐色 3/10存 カマド左袖
6	甕		胸部は僅かに張る。器内は一定している。	胸部外面はヘラ状工具の痕跡が残り、他は横ナデされている。内面は斜位のヘラナデ。	A'+C+E+F 内:暗茶褐色 外:赤褐色 3/20存 床
7	小形甕	口径(18.8)	胸部は中位で大きく膨らむ。器内は一定している。	胸部外面は磨滅している。内面は横位のヘラナデ。	A+A'+D+F 内:黑色 外:黑褐色 1/10存 覆土



第17図 天神林遺跡 6号住居跡出土遺物(3)



第18図 天神林遺跡6号住居跡出土遺物(4)

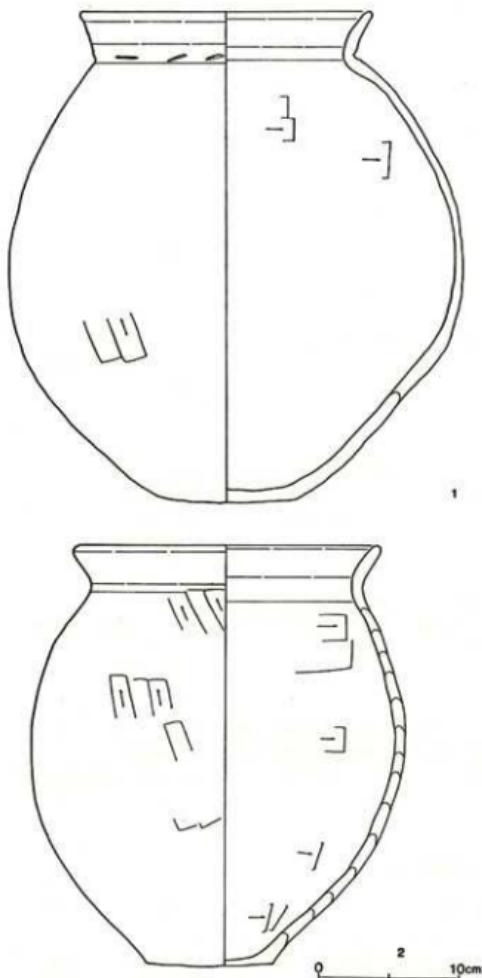
0 10cm

## 天神林遺跡 6号住居跡出土遺物(4)(第18図)

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	甕	口径 15.6 胴径 20.0	口縁部は緩やかに外反する。端部は丸い。胴部は中位で張り、最大径をもつ。器内は一定している。	全面に亘り、磨滅している箇所が多い。胴部外面は縦位のヘラケズリ。	A+B+E+F 内外: 淡暗茶褐色～淡赤褐色 2/5存 床 鉱物粒付着
2	鉢	口径 16.0 器高 10.3 底径 8.9	口縁部は短く、外反する。端部は丸い。胴部は丸味をもって平底の底部へ移行する。底部はやや丸味をもつ。	内面は黒色化され、口縁部外面にかけては横ナデ。胴部外面は縦位のヘラケズリ。底部は磨滅している。	A+A'+E 内: 灰黒褐色 外: 赤褐色～淡赤褐色 7/10存 床
3	瓶	底径 6.5	中央部付近に1cm弱の孔を2個(残存)有する。胴部は内湾して立ち上がる。	胴部外面は斜位のヘラケズリ。内面は不定方向のヘラナデ。	A+A'+B+C+E+F 内外: 淡茶褐色～黒褐色 3/20存 床
4	台付甕		胴部は内湾して立ち上がる。底部の器内は厚い。	胴部外面上半は磨滅している。下半は縦位のヘラケズリ。内面は横位のヘラナデ。	A+C+E+F 内: 暗褐色 外: 赤褐色 1/2存 床直
5	壺	底径 6.7	平底で、胴部は大きく内湾しながら立ち上がる。底部の器内はやや厚い。	胴部外面は斜位のヘラケズリ。内面は横位のヘラナデ。磨滅目立つ。	A+A'+B+C+E 内外: 暗赤褐色～淡赤褐色 3/10存 覆土下層
6	壺	口径 19.4	口縁部は外反し、内湾ぎみに外傾する。端部は内側を丸くつくる。胴部は中位で大きく膨らむ。	口縁部は内外面とも横ナデ。胴部外面は斜位のヘラケズリ。内面は横ナデ。横位のヘラナデ(下半)。	A+A'+B+C+E+F 内: 赤褐色 外: 赤褐色～暗褐色～橙褐色(下: 黒褐色) 7/10存 覆土

## 天神林遺跡 6号住居跡出土遺物(5)(第19図)

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	壺	口径 21.0 胴径 32.2 底径 8.9 器高 35.0	口縁部は外傾し、端部付近で外反する。端部は丸い。胴部は中位で大きく膨らむ。底部は平底である。形態やや歪む。	全面に亘り、磨滅が著しい。胴部外面は斜位のヘラケズリで、口縁部まで及んでいる。内面は横位のヘラナデ。	A+A'+C+E+F 内: 淡赤褐色～暗赤褐色 外: 赤褐色～暗赤褐色 7/10存 床
2	壺	口径 22.0 胴径 26.6 底径 9.1 器高 29.9	口縁部は大きく外反する。端部は丸い。胴部は中位で張り、内湾して平底の底部に移行する。形態整う。輪積痕明瞭。	口縁部は内外面とも横ナデ。胴部外面で斜位のヘラケズリ、内面は横位のヘラナデ。内外面とも磨滅は著しい。	A+A'+B+C+E+F 内: 暗赤褐色～赤褐色 外: 黒褐色～暗赤褐色 3/5存 床

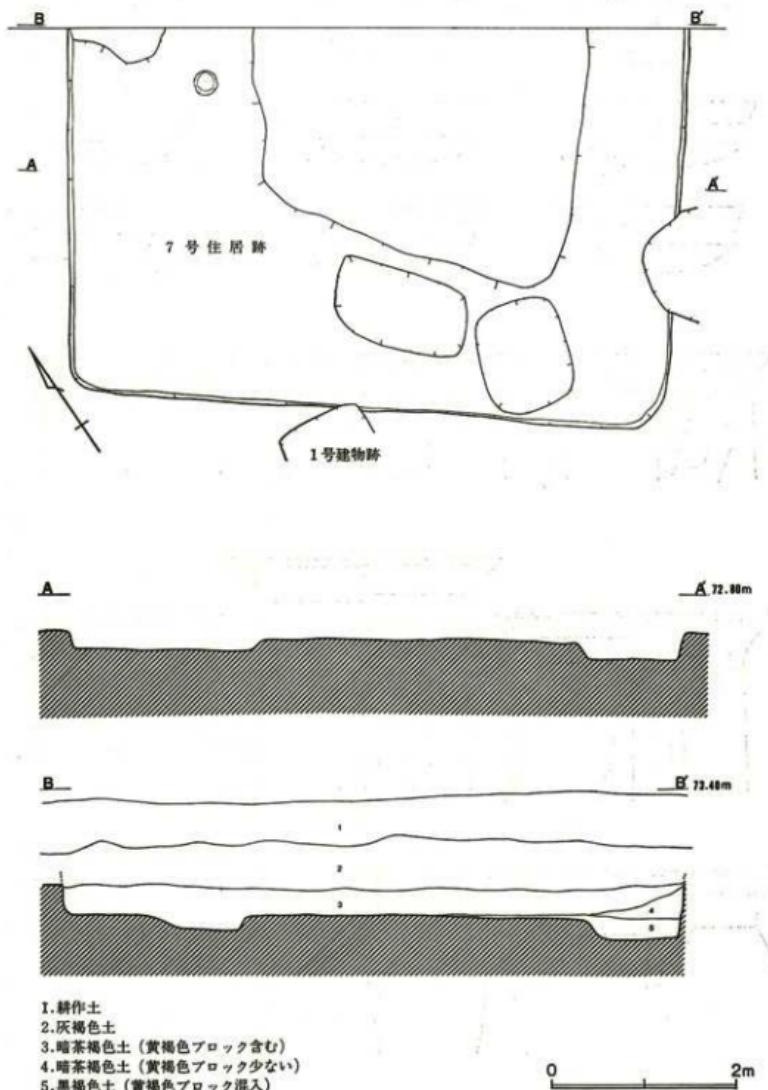


第19図 天神林遺跡 6号住居跡出土遺物(5)

(7) 天神林遺跡 7号住居跡

(第20図)

1辺6.45mの整ったプランを示すが北側は調査範囲外である。床面状況は良好ではなく、遺物レベルで確認できた。中央付近は地山層（黄褐色粘土質土）を残すが、その周辺は更に掘り込んでおり掘形部分がある。壁側は壁ラインと全く同一で、床中央寄りは雑に掘り上がっている。掘形内につまられた土は地山層とその直上の土層の混合土であるが直上層土が多いめ黒褐色を呈し、その中に地山層のブロックが混入している。床面下18cmの小ピットがあるが主柱穴とは認めがたい。遺物は床面上に多く散乱しており長甕、小形甕、瓶、壺がある。北壁寄りに壺が多く、甕類は中央およびその東寄りに多かった、その他床面上に自然礫が数ヶ散乱する部分が3ヶ所あった。小ピット周辺と、東壁際に2ヶ所あり、特に南東隅寄りの一群は14ヶの自然甕（長さ15~20cmの直方体形状）が散乱していた。なお、住居跡は土壤Na1と建物跡の柱穴に切られている。



第20図 天神林遺跡 7号住居跡

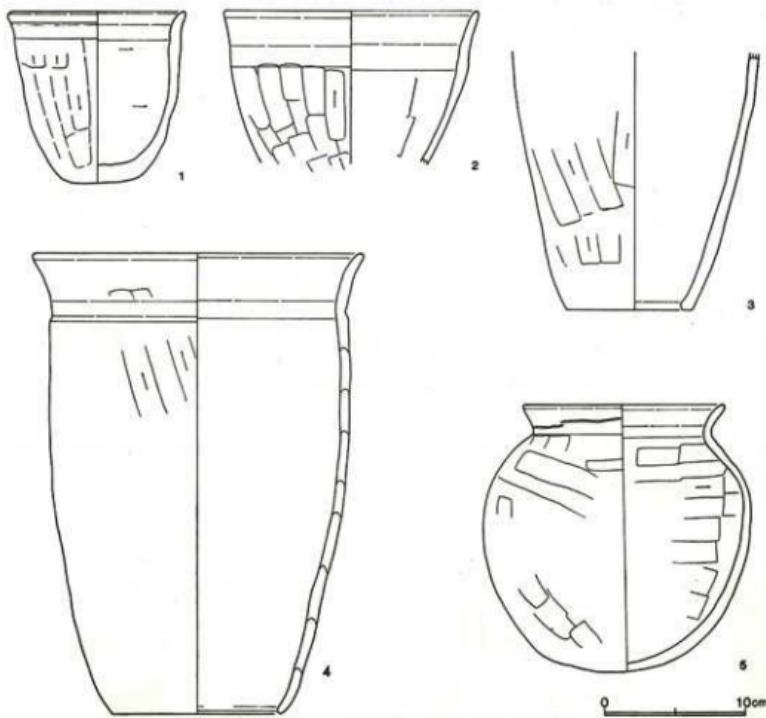


第21図 天神林遺跡7号住居跡出土遺物(1)

## 天神林遺跡 7号住居跡出土遺物(1) (第21図)

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	壺	口径 12.2 器高 4.8	口縁部は緩やかに外反し、端部付近で内湾ぎみに外傾する。体部との境の稜は緩やか。体部は丸く、底部へ移行。形態やや歪む。	内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は磨滅している。体部外面は凹凸目立つ。	A' 内外:明赤褐色 9/10存 覆土
2	壺	口径 11.4 器高 4.6	口縁部は緩やかに外反する。端部は丸い。体部との境の稜は緩やかに丸味を持って体部・底部へ移行する。底部は肉厚。形態整う。	内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は磨滅している。内面のナデは丁寧。	A+A'+E 内外:淡茶褐色 19/20存 床
3	壺	口径(11.3)	口縁部は外反し、外傾する。端部は丸い。体部との境の稜は明瞭。体部は丸味を持つ。	内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は磨滅している。内外面とも磨滅の進行著しい。	A'+E 内外:淡茶褐色 1/5存 床
4	壺	口径 13.7 器高 4.6	口縁部は外傾し、中位に低い段を持ち、端部で外反する。端部は丸い。体部との境に大きな稜を持ち、浅い底部へ移行する。	内面から口縁部外面にかけては横ナデ及び不定方向のナデ。体部外面は部分的にヘラケズリを確認できるが、殆ど磨滅している。	A+F 内外:黒褐色～赤褐色 中心部:粗粒子付着 7/10存 床
5	壺	口径(13.3)	口縁部は緩やかに外反し、端部内湾ぎみに外傾する。体部との境には大きな稜を持つ。	全面に亘り、磨滅している。	A'+E 内外:淡褐色～淡茶褐色 1/5存 床
6	壺	口径 11.6 器高 4.6	口縁部は緩やかに外反し、端部は丸い。体部との境の稜は明瞭だが、磨滅の為、丸味を帯びる。体部は丸味を持ち、器内の厚い底部へ移行する。形態整う。	器面は全面に亘り、磨滅し、小さな凹凸が目立つ。	A+D+F 内外:淡茶褐色 7/10存 床
7	壺	口径 12.0 器高 4.8	口縁部は外反し、外傾する。端部は丸い。体部との境に大きな稜を持ち、体部から底部は丸味を持つ。形態整う。	全面に亘り、磨滅している。内面には僅かに横ナデの痕跡を留める。	A'+F 内外:赤褐色 底:明茶褐色 19/20存 床
8	壺	口径 11.9 器高 4.3	口縁部は外傾し、端部で外反する。端部は丸い。体部と境の稜は緩く、浅い底部へ移行する。形態歪む。	全面に亘り、磨滅している為、整形手法不明瞭。器面の凹凸目立つ。	A' 内外:淡茶褐色 4/5存 床
9	甕	口径(15.0)	口縁部は内傾ぎみに外反する。端部は丸い。胴部は肩部を持ち張る。	全面に亘り、磨滅している。胴部外面は僅かに横位のヘラケズリの痕跡を留めている。	A+B+F 内:暗赤褐色 外:黒褐色 1/5存 覆土

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
10	甕	口径(16.5)	口縁部は大きく外反する。端部は丸い。中位には整形による低い段を持つ。胴部は僅かに張る。口縁部は未調整部を残す。	口縁部は内外面とも横ナデ。胴部外面は斜位のヘラケズリで口縁部まで及ぶ。内面は不定方向のナデ。	A+A'+B+D+F 内:淡赤褐色 外:暗赤褐色 1/5存 覆土
11	甕	口径(18.2)	口縁部は外反し、端部は丸い。胴部は僅かに張る。	口縁部は内外面とも横ナデ。胴部は縦位のヘラケズリ。口縁部付近はナデ(指か?)内面は斜位のヘラナデ。砂粒の付着目立つ。	A+A'+C+E+F 内:淡赤褐色 外:赤褐色 1/5存 覆土
12	甕	口径(16.6)	口縁部は大きく外反する。端部は丸い。口縁部は整形による段が中位に生じる。胴部は直線的に垂下する。	口縁部は内外とも横ナデ。胴部外面は斜位のヘラケズリ。内面はナデと思われるが殆ど磨滅している。	A+A'+B+C 内:淡灰褐色 外:赤褐色 1/10存 覆土
13	甕	口径 19.6	口縁部は外反し、端部付近で内湾ぎみに外傾する。端部は丸い。胴部は僅かに張る。ヘラケズリは口縁部まで及ぶ。	口縁部は内外面とも横ナデ。胴部外面は縦位のヘラケズリでやや雜。内面は横位のヘラナデ。口縁部内面に黒色鉱物粒多量付着。	A+A'+E+F 内外:淡赤褐色~茶褐色 3/10存 床
14	甕	口径 19.7	口縁部は外反し、端部は丸い。胴部上半には段を有し、直線的に垂下する。形態至む。	口縁部内外面は横ナデ。胴部外面は縦位のヘラケズリ。内面は不明瞭。整形不良。砂利多量に付着。	A+A'+F 内外:暗赤褐色 1/2存 覆土
15	甕	口径(15.6)	口縁部は大きく外反する。端部は丸い。胴部との境に低い段を持つ。胴部は丸味を持って底部へ移行する。	口縁部は内外面とも横ナデ。胴部は縦位のヘラケズリが施されるが、口縁部との境は磨滅。内面は横位のヘラナデ。	A+A'+B+C+F 内外:茶褐色 1/10存 覆土
16	甕	口径(18.8)	口縁部は外反し、端部付近で内湾しながら外傾する。端部は丸い。胴部は張る。器内は一定する。	口縁部は内外面とも横ナデ。胴部外斜位のヘラケズリ。内面は横位のヘラナデ。横ナデ丁寧。	A+A'+B+C 内:灰褐色 外:淡赤褐色 1/5存 床
17	甕	口径(17.2)	口縁部は外反する。端部は丸い。胴部は中位で張る。	口縁部は内外面とも横ナデ。胴部外面は縦位のヘラケズリ。内面は縦位のヘラナデ。ヘラ状工具による棒状の痕跡を残す。	A+C+F 内外:淡赤褐色 3/10存 覆土
18	甕	口径(14.5)	口縁部は緩やかに外反する。端部は丸い。胴部は張って最大径を持つ。器内は一定している。	口縁部は内外面とも横ナデ。胴部は縦位のヘラケズリが施されるが、殆ど磨滅している。内面は横位のヘラナデ。器面の凹凸目立つ。	A'+F 内外:淡茶褐色 3/10存 床



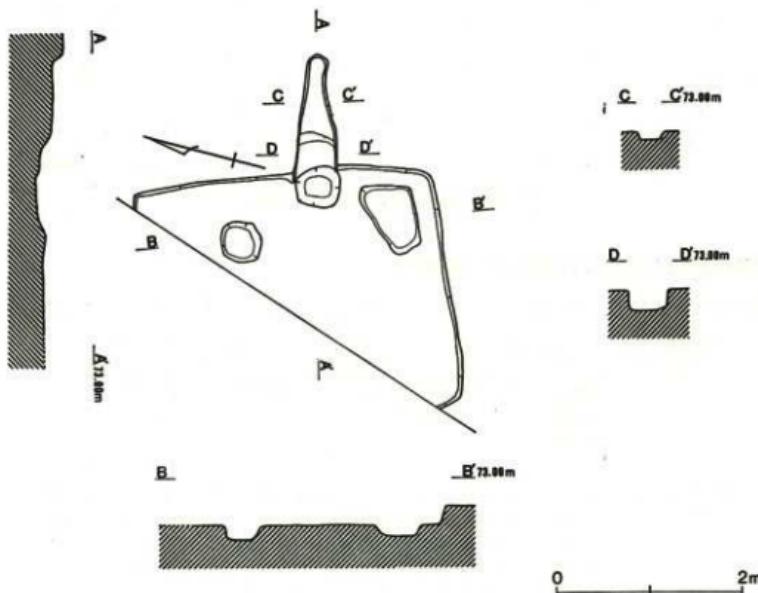
第22図 天神林遺跡7号住居跡出土遺物(2)

## 天神林遺跡7号住居跡出土遺物(2)(第22図)

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	小形甌	口径 12.7 器高 12.2	口縁部は短く外反し、端部は丸い。中央部に一本の沈線が通る。胸部は内湾し、底部へ移行する。輪横痕明瞭。	口縁部は内外面とも横ナデ。胸部外面は縦位のヘラケズリ。内面は横ナデと思われる。内外面とも磨滅は著しい。	A+A'+E+F 内: 淡黒褐色 外: 茶褐色 3/5存 床
2	鉢	口径(18.1)	口縁部は緩やかに外反し、外傾する。端部は丸い。胸部は口縁部との境に緩い段をもって内湾し、底部へ移行する。直の可能性あり。	口縁部内外面は横ナデ。胸部は縦位のヘラケズリ、内面は横位のヘラナデ。内面は入念にナデが施される。	A'+B+C+E+F 内: 淡茶褐色~赤褐色 外: 淡褐色~黒褐色 3/10存 床

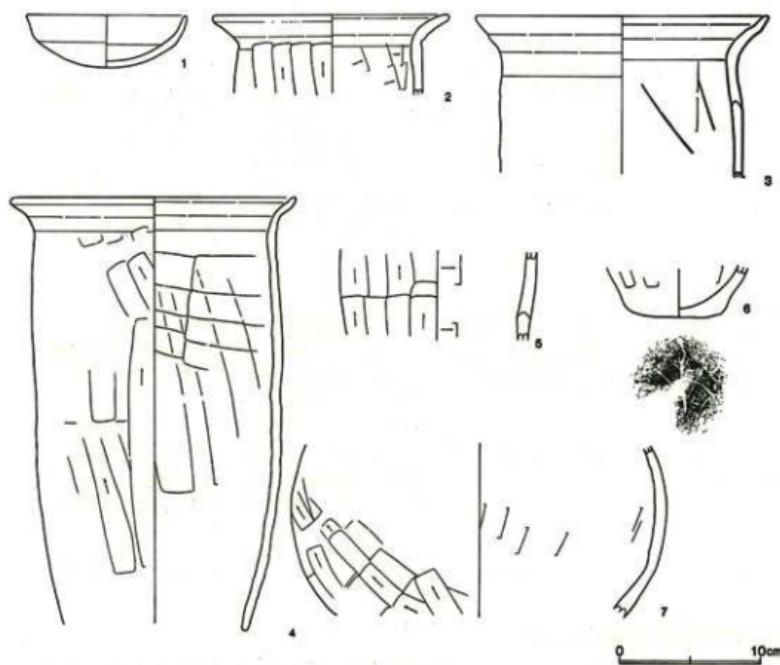
番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
3	瓶		胸部は緩やかに内湾ぎみに立ち上がる。孔端部はへラで削り込まれる。	胸部外面は縦位のヘラケズリ。内面は磨滅している。	A+A'+F 内外:暗赤褐色 3/10存 床
4	瓶	口径 23.6 器高 32.7 孔径 11.7	口縁部は緩やかに外反し外傾する。端部は丸い。胸部との境に段をもつ。胸部は僅かに内湾しながら、孔部へ移行する。輪積痕明顯。	全面に亘り、磨滅は著しい。口縁部は横ナデ、胸部外面は斜位のケズリと思われる。ヘラケズリは口縁部まで及ぶ。形態良好。	A+A'+B+C+E+F 内:赤褐色～橙褐色 外:淡橙褐色 3/5存 覆土
5	小形壺	口径 14.4 器高 19.0 胸径 19.0	口縁部は外反する。端部は丸い。胸部は上半部で大きく張り、内湾して丸底の底部へ移行する。形態やや歪む。	口縁部は内外面とも横ナデ。胸部は若干磨滅ぎみであるが、斜位のヘラケズリ。内面は横位のヘラナデ。口縁部にヘラ状工具の痕跡を留める。	A+A'+E+F 内外:淡赤褐色～灰黒褐色 1/2存 床

(8) 天神林遺跡 8号住居跡 (第23図)



第23図 天神林遺跡 8号住居跡

3.25m × 2.5m の長方形プランを示す。南西側は道路敷のため調査は不可能であった。壁は18cmまで確認できた。床面は概して良好である。柱穴は1ヶ所検出したが、床面下13cmであった。カマドは整った形態で、焚口、燃焼、煙道部がよく残っていた方である。焚口部は前面を皿状に掘りくぼめ(床面下3cm)、燃焼部は幅、奥行各45cmと30~35cmで方形プランを示す。底面はやや傾斜して煙道部に至り、更に85cmまで煙道が確認できた。燃焼部は全面焼けているが、特に側壁は厚さ約5cmのレンガ状焼土になっていた。なお袖部についてはこれを欠く構造である。カマド右側に浅いピットがある。床面下18cmで貯蔵穴になるものと思われる。遺物は床面から甕類、壺が出土している。



第24図 天神林遺跡8号住居跡出土遺物

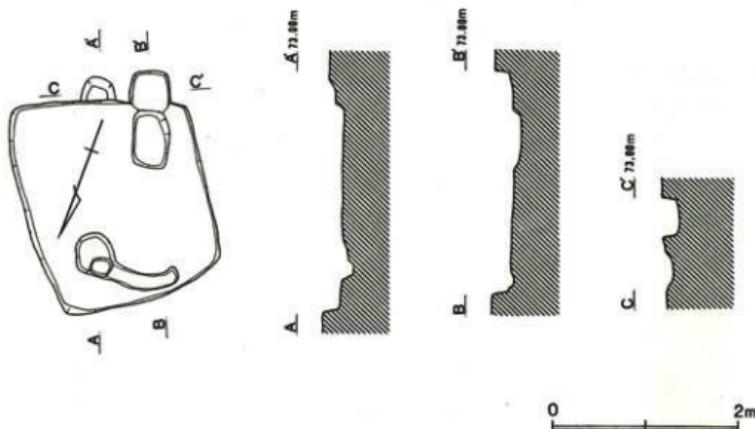
## 天神林遺跡8号住居跡出土遺物（第24図）

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	壺	口径 11.4 器高 3.6	口縁部は内海ぎみに外傾する。端部は丸い。体部は丸味をもって底部へ移行する。形態整う。	口縁部は内外面とも横ナデ。体部内外面は磨滅している。底部はヘラケズリの後、ナデが施されている。	A+E+F 内外:淡茶褐色 19/20存 床

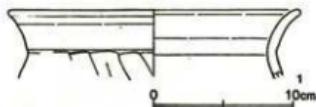
番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
2	甕	口径(16.9)	口縁部は大きく外反する。端部は丸い。胴部との境には一本の沈線が巡る。胴部は僅かに張る。	口縁部は内外面とも横ナデ。胴部外面は縦位のヘラナデ。内面は横位のヘラナデ。	A+B+C+F 内外:淡赤褐色 1/10存 覆土下層
3	甕	口径(20.9)	口縁部は外反後、内湾して外傾する。端部は丸い。胴部は僅かに張る。輪積痕明瞭。	全面に直り、磨滅しているが、胴部内面には僅かに横位のヘラナデ、ヘラ状工具による沈線が残る。	A+D+F 内外:淡橙色 1/5存 床直
4	甕	口径(20.5)	口縁部は外反し、外傾する。胴部は僅かに張って孔部へ移行する。孔端部は磨滅の為、丸味を帯びる。口縁部に未調整部を残す。	口縁部は内外面とも横ナデ。胴部外面は若干磨滅しているが、斜、縦位のヘラケズリ。内面は横、縦位のヘラナデ。輪積痕不明瞭。	A+A'+B'+E+F 内外:淡赤褐色～赤褐色 下部:黒褐色 3/10存 床直
5	甕		輪積痕を明瞭に残す。	胴部外面は縦位のヘラケズリ、内面は横位のヘラナデ。	A+C+F 内外:暗赤褐色 1/5存 床直
6	甕	底径 6.6	平底であるが、丸味をもつ。胴部は緩やかに内湾しながら立ち上がる。	底部には木葉痕を有する。胴部外面は磨滅が進行しているが、僅かに縦位のヘラケズリが確認できる。内面は横位のヘラナデ。	A+C+E+F 内外:赤褐色～暗示褐色 1/5存 床
7	甕		胴部は大きく膨らむ。	胴部外面は斜位のヘラケズリ、内面は横、斜位のヘラナデ。内面は未調整部分を多く残す。	A+A'+B+D+F 内:暗赤褐色 外:赤褐色～暗赤褐色 3/10存 床

## (9) 天神林遺跡 9号住居跡（第25図）

2.2m×1.95mの不整合形プランを示す。壁は15cm程確認できた。床面は概ね良好である。柱穴と思われるピットが北西隅にあるが2重ピットで、最深部は床面下12cmである。それに連なってのびる小溝は3cmの深さで、通例の住居跡とはやや異なる。カマドは南東壁側にある幅、奥行ともに40cmで無抽型であるが壁面がほとんど焼けておらず焼土・炭化物が散布するのみである。前面は長方形プランを示す皿状ピットがあり、若干の焼土・炭化物がつまっていた。なおカマド左側に焼土がつまった皿状ピットが壁外にあるが、これは、床面からのレベル差があり、カマドとはみなしがたい。壁によって切られた状態なので、直接関連は無い造構と考えられる。遺物は非常にすくなく覆土中から長甕片が出土している。



第25図 天神林遺跡 9号住居跡



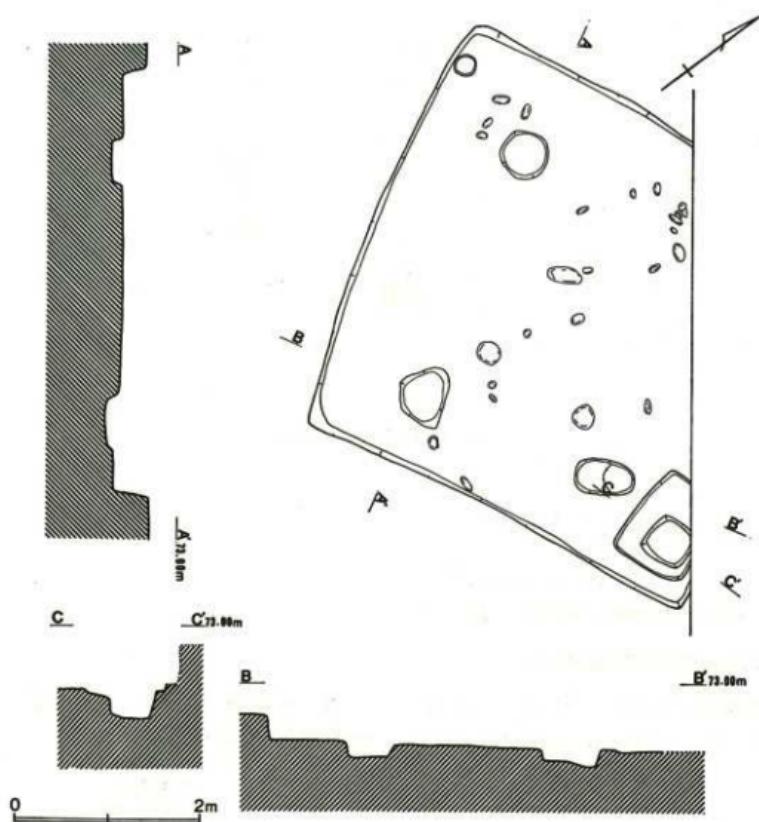
第26図 天神林遺跡 9号住居跡出土遺物

## 天神林遺跡 9号住居跡出土遺物

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	甕	口径(20.8)	口縁部は大きく外反する。端部は丸い。胴部は張る。	口縁部は内外面とも横ナデ。胴部外面は斜位のヘラケズリ。	A+A'+C+F 内:灰茶褐色 外:茶褐色 1/10存 覆土

## 10 天神林遺跡10号住居跡（第27図）

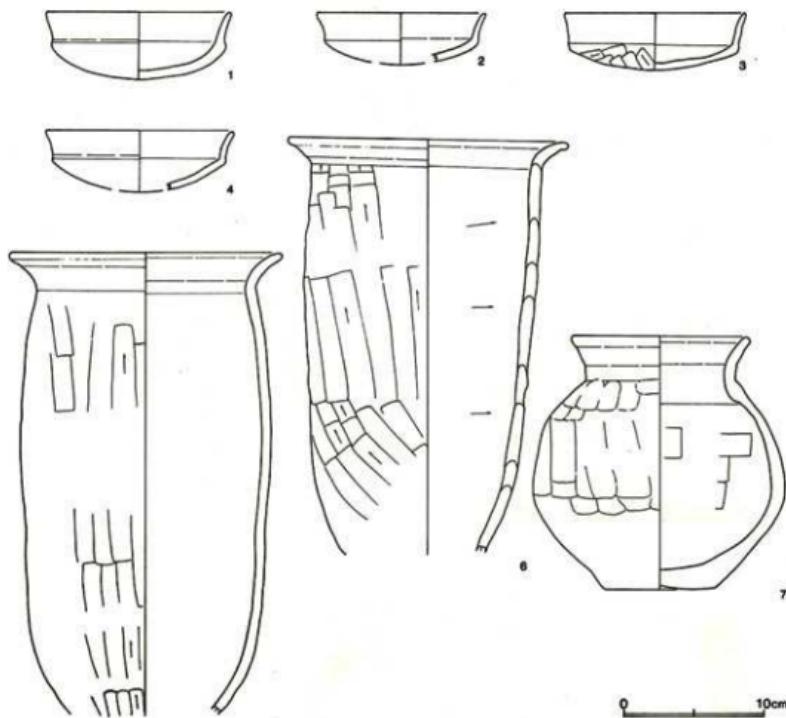
北側は調査範囲外であるが、4.55m×4.5m形プランの住居跡である。床面は概して良好で、焼土・炭化物が多く散布し、炭化材も部分的に認められた。また10~20cm大の礫が全面に散乱しているが、これは他の例とは異なり、形態、規模の差が大きい自然礫であった。柱穴は3ヶ所確認されている。床面下15~20cmであった。なお南西隅の小ピットは42cmの深さをもつが性格不明である。カマドは北側の未調査区にあるものと思われる。貯蔵穴は1.0m×0.8mの長方形プランで、更に一辺45cmの方形ピットを内部に掘り込んでいる。形態・構造ともに整っており典型的な貯蔵穴である。平坦部は蓋受けと思われる。貯蔵穴覆土中から壺が出土している。その他床面から甕、壺が出土した。



第27図 天神林遺跡10号住居跡

天神林遺跡10号住居跡出土遺物（第28図）

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	壺	口径(13.0) 器高(4.7)	口縁部は緩やかに外反し、端部は丸い。体部との境に大きな稜をもち、体部から底部の器内は厚く丸味をもつ。	口縁部は横ナデ。体部内外面は磨滅している。器面の凹凸目立つ。	A+A'+E+F 内:淡赤褐色 外:明茶褐色 3/10存床

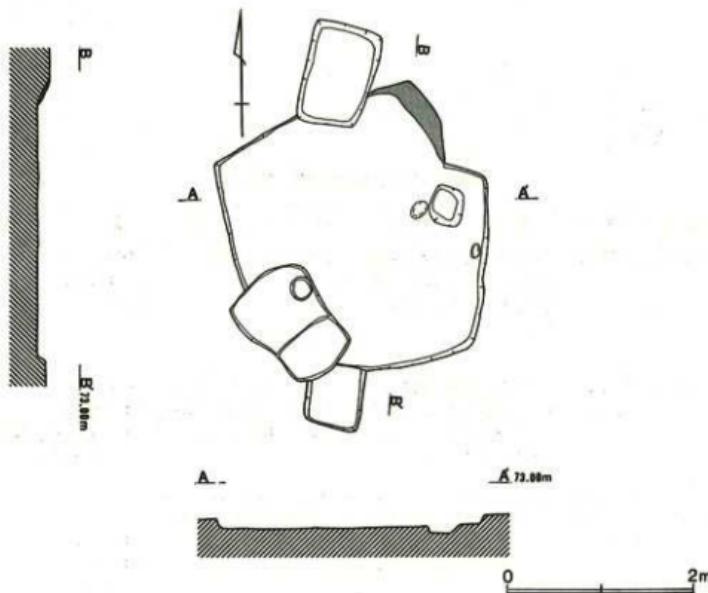


第28図 天神林遺跡10号住居跡出土遺物

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
2	壺	口径(12.1)	口縁部は外反する。端部は丸い。体部との境には緩やかな稜をもつ。体部は丸味をもつ。	全面に直り、磨滅している。	A' + C 内外: 橙褐色 1/5存 床
3	壺	口径(13.0) 器高(4.0)	口縁部は中位に緩く外反する。端部は丸い。体部との境には丸い稜をもち、浅い底部へ移行する。	内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は斜位へのラケズリ。磨滅目立つ。	A + F 内: 淡赤褐色 外: 黒灰色～淡茶褐色 2/5存 貯藏穴覆土
4	壺	口径(13.3) 器高(4.6)	口縁部は中位に緩く外反する。端部は丸い。体部との境の稜は緩やかであるが明瞭。	口縁部は内外面とも横ナデ。体部外面は磨滅している。	A' F 内: 淡茶褐色 外: 赤褐色 2/5存 床

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
5	甕	口径(19.4)	口縁部は大きく外反する。端部は丸い。胸部は僅かに張り、下半で輪積みの為、内湾し、再び膨らみを持って底部へ移行する。	全面に亘り、磨滅している箇所が多く見られる。胸部外面は整形がやや不良でやや粗い縦位のヘラケズリが残る。	A+A'+C+E+F 内外：暗赤褐色 2/5存 覆土
6	甕	口径(19.8)	口縁部は大きく外反する。端部は外側に屈曲する。胸部は僅かに張りながら底部へ移行する。形態や蓋む。輪積痕明瞭。整形不良。	口縁部は内外面とも横ナデ。胸部外面は縦、斜位のヘラケズリ。内面は磨滅が著しく、輪積後のナデが残る。	A+A'+C+E+F 内：灰褐色 外：淡茶褐色～淡暗褐色 2/5存 覆土
7	小形壺	口径 12.8 胸径 18.0 器高 18.0	口縁部は直立後、外反する。端部は丸い。胸部は下半で大きく膨らみ、内湾して、平底の底部へ移行する。底部は上底で厚い器肉を持つ。形態整う。	口縁部は内外面とも横ナデ。胸部外面は縦位のヘラケズリ、内面は横位のヘラナデ。若干、胸部下半は磨滅している。	A+A'+B+C+E+F 内：赤褐色～淡赤褐色 外：赤褐色～黒赤褐色 9/10存 床

(1) 天神林遺跡11号住居跡 (第29図)

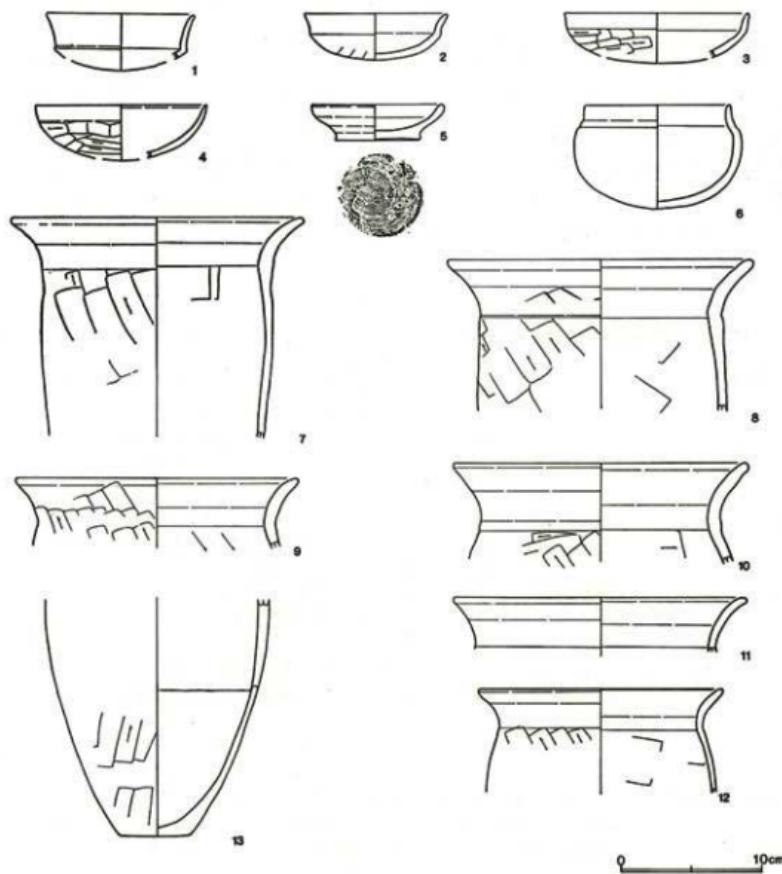


第29図 天神林遺跡11号住居跡

非常に不規則な形態であるが、北側焼土部分がカマドの残存であること、長方形プランの小ピットがそれに伴う貯蔵穴と思われること、床面らしき平坦面の存在、遺物が出土していること等の判断で、この落ち込み部を住居跡とした。土壤その他の擾乱でかなり乱れているが、北側は壁として考えられる。一辺 2.1 m の小規模な住居跡としてよいであろう。柱穴は不明である。貯蔵穴は 45 × 30 cm であるが、よく整った掘り方をしている。床面下 10 cm であった。なお土壤はすべて 11 号住居跡より新しい。カマドは焼土、炭化物が散布しているが、焼けた部分は確認できなかったので、この部分も擾乱を受けているものと思われる。遺物はカマド部分と思われるところから長甌、壺が出土しており、他に床面からも同じ器種の土器が出土した。小形皿 (No. 5) は混入土器である。

天神林遺跡 11 号住居跡出土遺物 (第 30 図)

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	壺	口径(10.7)	口縁部は緩やかに外反する。端部は丸い。体部との境の線は明瞭。	口縁部は内外面とも横ナデ。	A + A' 内外: 灰茶褐色 3/5 存 床
2	壺	口径(9.9)	口縁部は外反する。端部は丸い。体部との境に丸味のある稜をもつ。体部から底部は丸味をもって移行する。	内面から口縁部外面にかけては横ナデ。体部表面は斜位のヘラケズリが施されるが、多くは磨滅している。体部外面に未調整部を残す。	A + A' + E 内外: 淡赤褐色～茶褐色 2/5 存 カマド
3	壺	口径(13.1)	口縁部は緩やかに外反する。端部は丸い。体部は丸味をもつ。	内面から口縁部外面は横ナデ。体部表面は横位のヘラケズリ。	A' + B + E 内: 暗橙褐色 外: 暗褐色 1/5 存 カマド
4	壺	口径 12.3	口縁部は内湾ぎみに外傾する。端部は丸い。体部はやや器内を厚くつくる。	内面から口縁部外面は横ナデ。体部表面の整形はやや難で、横、斜位のヘラケズリ。	A' + F 内外: 赤褐色～淡赤褐色 2/5 存 覆土
5	皿	口径 9.0 器高 2.5	口縁部は内湾して外傾する。端部は肥厚し、丸い。体部は丸味をもって、上底ぎみの底部へ移行する。底部端部は外に開く。	ロクロ水挽き整形、底部は回転糸切り。口縁端部は黒色をし、燈明皿として使用されたものと思われる。	A + B + D + E 内外: 淡赤褐色 完存 覆土
6	壺	口径 10.4 器高 (7.3)	口縁部は段を有し、内傾する。端部は丸い。体部は僅かに張り、内湾して丸底の底部へ移行する。形態整う。	全面に亘り、磨滅しており、整形手法不明瞭。	A + A' + E 内: 淡赤褐色 外: 茶褐色、黒褐色 7/10 存 床



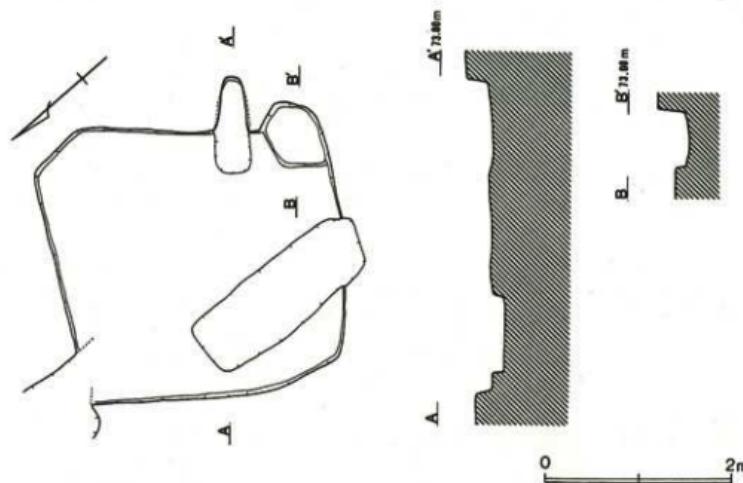
第30図 天神林遺跡11号住居跡出土遺物

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
7	甕	口径(20.7)	口縁部は肥厚し、外反する。端部は丸い。胴部は僅かに張る。	口縁部は内外面とも横ナデ。胴部外面は斜位のヘラケズリ。内面は横位のヘラナデ。若干磨滅ぎみ。	A+A'+B+C+F 内外：暗赤褐色～橙褐色 3/10存 カマF

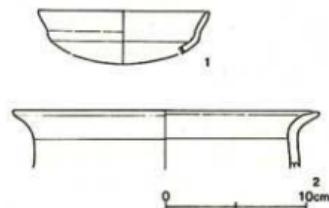
番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
8	甕	口径(21.8)	口縁部は外反し、外傾する。端部は丸い。胴部上半部は直線的である。形態整う。	口縁部は内外面とも横ナデ。胴部外面は斜位のヘラケズリで、口縁部まで及ぶ。内面は斜位のヘラナデ。	A+A'+B+F 内:淡赤褐色 外:淡赤褐色 3/10存 カマド
9	甕	口径(20.2)	口縁部は外反する。端部は丸い。	口縁部は内外面とも横ナデ。胴部外面は斜位のヘラケズリ。内面は若干磨滅気味である。	A+B'+C+E+F 内外:茶褐色~淡赤褐色 1/10存 カマド
10	甕	口径(21.1)	口縁部は大きく外反する。端部は丸い。胴部との境に緩やかな段を有し、胴部は張る。	口縁部は内外面とも横ナデ。胴部外面は斜、横位のヘラケズリ、内面は横位のヘラナデ。	A+B+C+F 内外:淡茶褐色 1/10存 カマド
11	甕	口径(20.9)	口縁部は外反する。端部は丸い。内面には一本の浅い沈線が巡る。	口縁部の内外面は横ナデ。	A+A'+B+C 内:灰褐色 外:淡橙褐色 1/10存 覆土
12	甕	口径(17.5)	口縁部は外反する。端部は丸く、内側に一本の沈線が巡る。胴部は器内を薄くして、張る。	口縁部は内外面とも横ナデ。胴部外面は斜位のヘラケズリ、内面は縱位のヘラナデ(?)。内外面とも磨滅目立つ。	A+B+F 内外:淡赤褐色 3/10存 覆土
13	甕	底径 5.0	平底である。胴部は内湾して立ち上がる。	胴部外面下半は縱方向のヘラナデ。内外面とも磨滅が著しい。	A+A'+F 内外:暗赤褐色~橙褐色 3/10存 カマド

## 02 天神林遺跡12号住居跡（第31図）

やや不規則な台形プランである。東西辺2.85m、南北辺は西壁2.8m、東壁3.1mを測る。この付近は地山層の状態が不良で、壁のプランはやや不明瞭である。壁は17cmの高さまで確認できた。床面も同様に検出が困難であったが、土色の差で判断した。またカマド焚口面とのレベルでおよそのレベルをつかむことができた。柱穴は検出されない。カマドは東壁にあり、無袖型に属するが、右側の貯蔵穴が突出しているので、右袖があるように見える。幅、奥行は35cm、55cmで、側壁が内傾している。わずかに焼けているが、他の例のようなレンガ状焼土にはなっていない。前面に皿状のピットがある。この中央にやや浮いた状態で20cm大の自然礫があった。横転した状態で2次移動したものと思われ、当初はカマド内の支柱であった可能性が強い。貯蔵穴は隅部にあり、通例とは異なり外側に突出している。床面下13cmであった。なお土壌および溝によって西側部分が切られていた。坏、長甕が出土している。



第31図 天神林遺跡12号住居跡

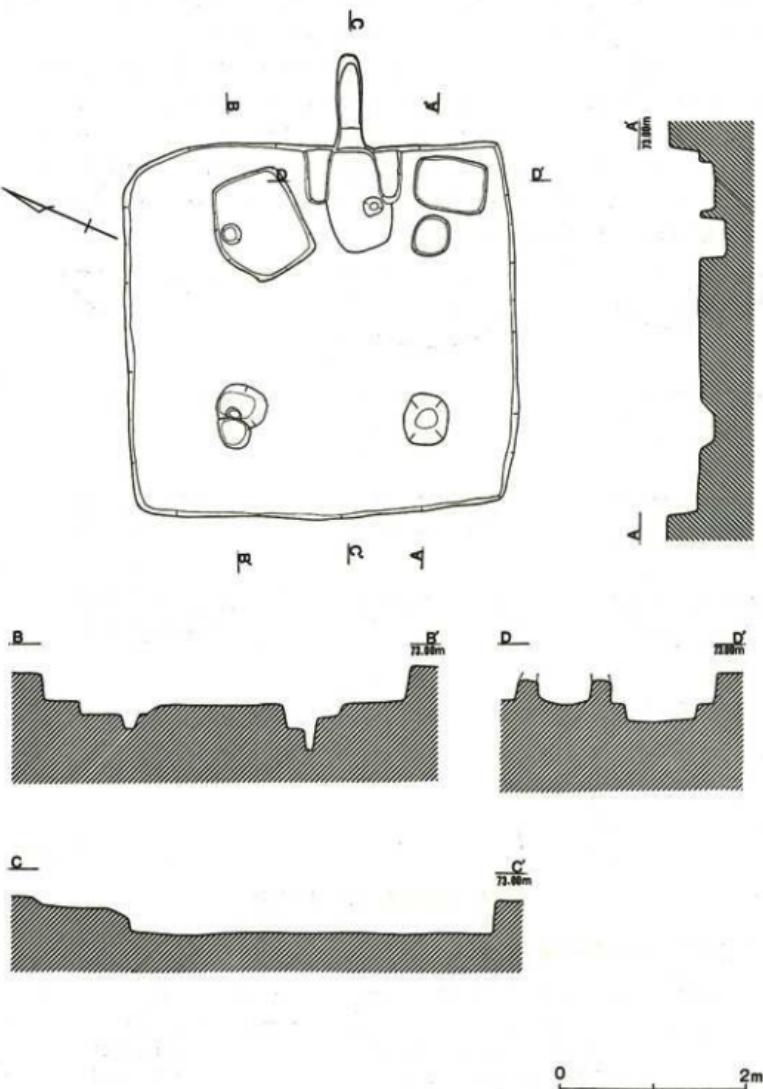


第32図 天神林遺跡12号住居跡出土遺物

天神林遺跡12号住居跡出土遺物（第32図）

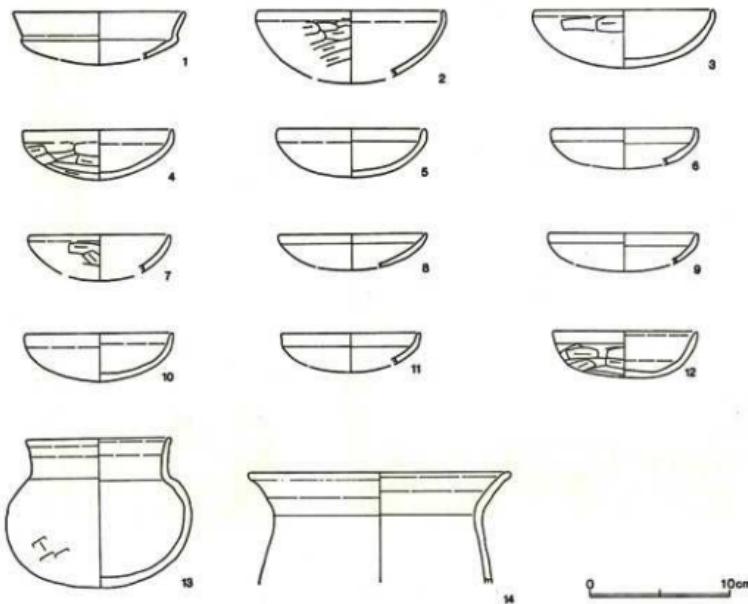
番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	壺	口径(12.2)	口縁部は外反し、内湾ぎみに外傾する。端部は丸い。体部との境に緩やかに稜を持つ。	全面に亘り、磨滅している為、整形手法不明瞭。	A+A' 内：明赤褐色 外：淡茶褐色 1/10存 覆土
2	甕	口径(21.8)	口縁部は大きく外反する。端部は丸い。	全面に亘り、磨滅しているが、口縁部内面には僅かに横ナデが残る。	A+E+F 内外：淡赤褐色 1/10存 覆土

(13) 天神林遺跡13号住居跡（第33図）



第33図 天神林遺跡13号住居跡

4.15m×4.00mの方形プランを示す。形態、構造ともによく整った住居跡である。床面の一部を土壤に切られている。床面は良好で、4本の主柱穴がきれいに並ぶ、カマド寄りの2本は床面下29cmであるが、南隅のものは最も浅く14cm、また東南隅は2重になっている。深い方が掘り方がしっかりしており、位置的にも整っている。カマドは袖部を造りつけたもので、焚口前面に皿状のピットがあり、燃焼部へ続く。燃焼部は幅、奥行が55cm、50cmで、底面はやや平坦気味である。煙道部は下半がよく残り、一部天井部が残存する。幅、長さは20cm、1mまで確認できたが、底面の傾斜が少ないので、丁寧に掘り込んでいる。床面下15cmで、覆土中から小形壺、壺が出土している。住居跡内から壺、長甕が出土しているが壺の数量が多い。



第34図 天神林遺跡13号住居跡出土物

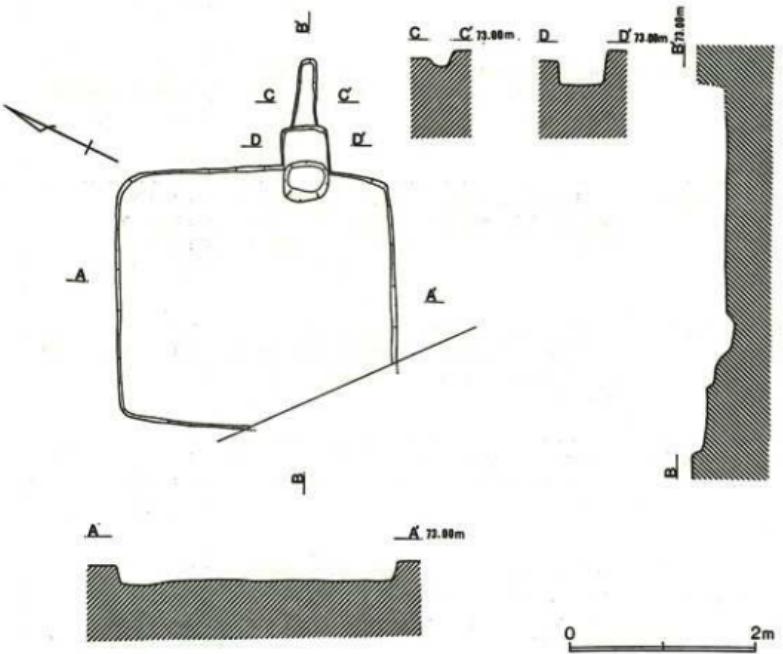
## 天神林遺跡13号住居跡出土物（第34図）

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	壺	口径(12.4)	口縁部は外反し、外傾する。端部は丸い。端部付近に浅い沈線が廻るが全周しない。接は明瞭。	全面に亘って、磨滅している。剥落目立つ。	A+D+E 内外：淡赤褐色 1/10存 覆土下層

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
2	壺	口径(13.3)	口縁部は内湾する。端部は丸い。体部から底部は丸味を持つ。器内は全体に薄い。	内面から口縁部外面にかけて横ナデ。体部から底部は横、斜位のヘラケズリ。底部との境は磨滅著しい。	A+E 内外: 淡茶褐色~暗茶褐色 1/5存 覆土下層
3	壺	口径(12.8)	器高口縁部は短く、内湾して立ち上がる。端部は内側に尖る。	内面から口縁部外面にかけては横ナデ。体部から底部は横、斜位のヘラケズリ。磨滅目立つ。	A+A'+E 内外: 淡茶褐色 3/10存 覆土下層
4	壺	口径 10.9 器高 (3.6)	直線的に立ち上がり、細く丸い端部をもつ。体部から底部は丸味をもつ。	内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は横位のヘラケズリ。底部磨滅。	A'+E 茶褐色~黒色(底部)~淡茶褐色 4/5存 床
5	壺	口径 10.8 器高 (3.5)	口縁部は内湾し、端部は丸い。体部は丸味をもって丸底の底部へ移行する。	全面に亘って、磨滅しており、整形手法不明瞭。	A+A'+E 内外: 淡赤褐色 底部: 暗褐色 3/5存 床
6	壺	口径(10.6)	口縁部は内湾気味に外傾する。端部は丸い。体部は若干丸味をもつ。	全面に亘って、磨滅しており、整形手法不明瞭。	A+A' 内外: 暗褐色~暗茶褐色 3/20存 覆土上層
7	壺	口径(10.4)	口縁部は短く、内湾し、端部は鋭く尖る。体部は丸味をもつ。	内面から口縁部外面にかけて横ナデされ、体部の一部にまで及ぶ。体部は斜位のヘラケズリ。	A+A'+F 内: 淡茶褐色 外: 淡赤褐色 3/5存 貯藏穴覆土
8	壺	口径(10.8)	口縁部は短く、内湾気味に外傾する。端部は磨滅の為やや平坦である。体部は丸味をもつ。	内面から口縁部外面にかけて横ナデ。体部は磨滅の為、整形手法不明瞭。	A'+E 内外: 明茶褐色~淡茶褐色 4/5存 床
9	壺	口径(10.9)	口縁部は短く、内湾気味に外傾する。体部は丸味を持つ。	内面は横ナデ。外面は磨滅の為、整形手法不明瞭。	A+F 内外: 淡赤褐色~淡茶褐色 1/10存 覆土下層
10	壺	口径 10.7 器高 3.5	口縁部は内湾気味に外傾する。端部は鋭く尖る。体部は丸味を帯び、丸底の底部へ移行する。	全面に亘って、磨滅しており、整形手法不明瞭。	A'+E 内外: 赤色 底部: 灰赤褐色 4/5存 貯藏穴覆土上層

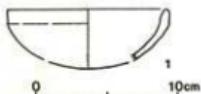
番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
11	壺	口径(11.1)	口縁部は外傾する。端部は丸い。体部は若干丸味をもつ。	全面に亘って、磨滅しており、整形手法不明瞭。	A+A'+E 内外：茶褐色～暗褐色 1/10存 覆土下層
12	壺	口径 10.3 器高 3.3	口縁部と体部の境が不明瞭。端部は外側に尖る。体部から底部は丸味をもつ。形態やや歪む	口縁部外面は横ナデ。体部外面は横位のヘラケズリがされ、口縁部まで及ぶ。内面及び底部外面は磨滅している。	A+A'+E 内外：淡赤褐色～茶褐色～黒灰色 9/10存 床
13	壺	口径 10.5 器高 10.6	口縁部は緩やかに外反する。端部は外側に若干屈曲し、丸い。体部に最大径をもつ。丸底。内面の調整丁寧。	内面から口縁部外面横ナデ。体部外面は斜位のヘラケズリ。大部分は磨滅の為、整形不明瞭。器面の凹凸目立つ(口縁部)。	A+A'+B+F 内：淡褐色 外：暗褐色 7/10存 覆土上層(貯藏穴)
14	甕	口径(18.8)	口縁部は大きく外反し、端部は丸い。胴部の器内は薄く、若干張る。	全面に亘って磨滅しており、整形手法不明瞭。	A+A'+B 内外：淡赤褐色 1/10存 覆土下層

14 天神林遺跡14号住居跡(第35図)



第35図 天神林遺跡14号住居跡

3.00m × 2.75m の方形プランで壁プランがよく整っている。床面は概して良好であったが、柱穴は検出されなかった。カマドは無袖形でよく整った作りである。燃焼部は幅、奥行は50cm、45cmで方形に壁を切り込み、側壁もほぼ垂直気味である。煙道部70cmまで確認できた。底面は傾斜が少ない。焚口部に大きな皿状ピットがあり、かなり深い（床面下14cm）が、これは掘り込みの最下底面であり、実際の使用面はやや上るものと思われる。遺物は非常に少なく、カマド底から壺が出土した程度であった。



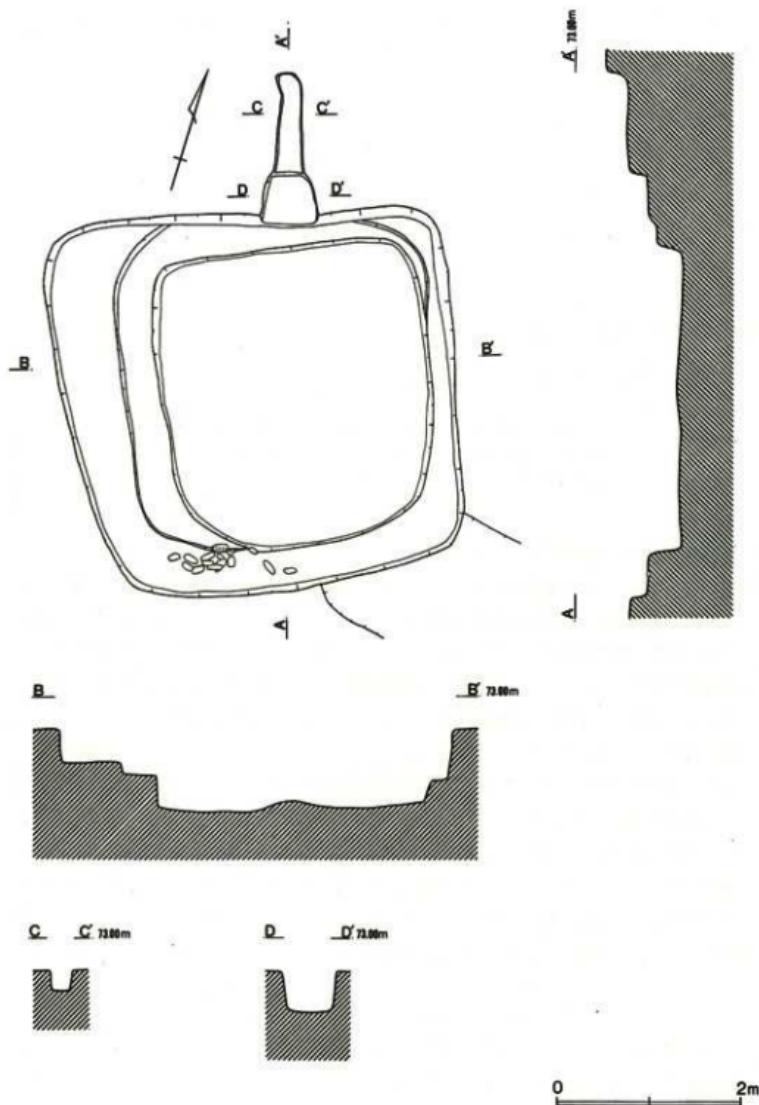
第36図 天神林遺跡14号住居跡出土遺物

## 天神林遺跡14号住居跡出土遺物（第36図）

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	壺	口径(11.4)	口縁部は肥厚し、内湾ぎみに緩やかに外傾する。体部との境の稜は緩やかで体部は丸味をもつ。	内面から口縁部外面にかけては横ナデ。体部外面は磨滅している。内面は黒色化されている。	A' + B + F 内：黒色 外：暗赤褐色 7/10 存 カマド

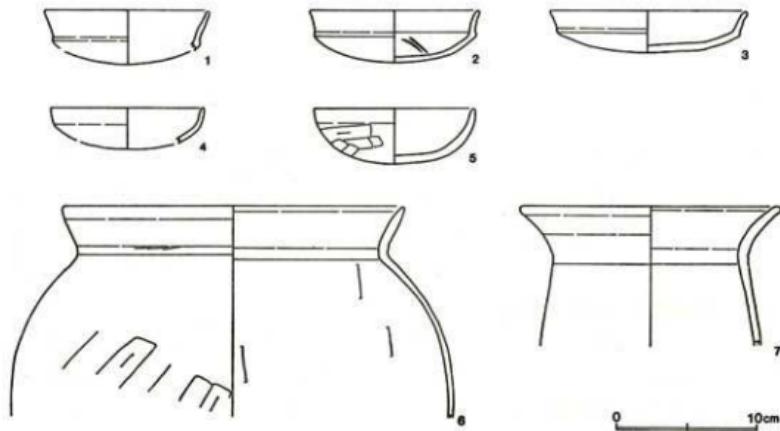
## 15 天神林遺跡15号住居跡（第37図）

長辺4.40m、短辺3.5m、奥行4.00mの台形プランの住居跡であるが、深い掘形をもつ竪穴が内側にある。その複合状況から竪穴の拡張されたものとみることができる。当初（第一次竪穴）は3.5m × 3.3m の方形の竪穴で構成されていたが、この第一次竪穴には深い掘形があり一次竪穴の床面下20~30cmまで掘り込まれている。この掘形は側壁底面とともに粗雑な面を残し、黄褐色土と黒褐色土がつまる。一次竪穴の床面以上は壁面もしっかりしており、床面は特に固結した状況ではないが、平坦面をよく残している。柱穴等については確認できなかった。掘形内にもその痕跡は認められなかった。なおカマドの存在については、特にその痕跡は認められなかった。これについては2次竪穴のカマドとの関係があるが、このカマドとの底面と1次竪穴床面と7cm程のレベル差があるが、特にカマドの焚口を思わせる遺構状況はなかった。したがって1次竪穴には本来的にカマドは無かったと考えられる。第一次竪穴に伴う遺物は検出されなかった。第一次竪穴を埋め、更に壁を拡張して、カマドを作った第2次竪穴が最終的な遺構である、柱穴等については検出できなかった。北壁に無袖型のカマドがある。幅、奥行が55cm、50cmで台形プランを呈する燃焼部があり、長さ1.05mの煙道がある。その先端は天井部がわずかに残っていたので、実際の煙道長として良いであろう。底面はほとんど傾斜が認められない。出土遺物にカマド内や床面から長甕、壺が出土している。その他に、東壁際西隅寄り床面にやや扁平気味の自然縞15個が密集して検出された。長さ15~20cm、幅10~15cm、厚さ5cm程度の縞で形状が各々類似した一群である。方向は一定せず特に並べて置かれた状況ではないが、その残存状況を観察すると、いずれも長辺が壁面と平行するような位置であり、またかたまって、ほぼ同レベルにあるので、当初はかなり整った状況で、長辺を相互にそろえ



第37図 天神林遺跡15号住居跡

てあったものと考えられる。やや離れたところにも同種の礫があるので、必ずしもこの状況で全く当初から住居内のこの場所に置かれていたとは限らないがひとまとめのある出土状態である。以上の遺物はいずれも2次窓穴に伴うものである。なお北東は溝によって切られている。また16号住居跡の煙道部分が隣接しているが、これに伴うと思われる焼土が15号住居跡の覆土中にまで認められたので、15号住居跡の方が古い。



第38図 天神林遺跡15号住居跡出土遺物

## 天神林遺跡15号住居跡出土遺物（第38図）

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	壺	口径(11.8)	口縁部は外反して外傾する。端部は丸い。	全面に亘り、磨滅している。	A' 内外：淡赤褐色 1/5存 覆土上層
2	壺	口径(12.1) 器高(3.7)	口縁部は外反し、外傾する。端部は外側に丸い。体部と境の稜は明瞭。付部から底部は丸味を持つ。	全面に亘って、磨滅している。体部外面にはヘラ状工具の痕跡が残る。	A+A'+F 内外：明茶褐色～淡赤褐色 1/2存 床
3	壺	口径(14.1) 器高(3.0)	口縁部は外反する。端部は外側に丸い。体部と境の稜は明瞭。体部は丸味を持ち、少し、平底状の底部へ移行する。	内面から口縁部外面にかけては横ナデ。体部及び底部外面は磨滅の為、整形手法不明瞭。	A+E+F 内：明茶褐色 外：淡赤褐色 3/10存 カマド
4	壺	口径(11.0)	口縁部は直線的に外傾する。端部は鋭く尖る。体部は丸味をもつ。	口縁部の一部の横ナデを除いては、全面に亘り、磨滅している。	A+A'+E 内：明灰褐色 外：灰褐色 1/5存 カマド

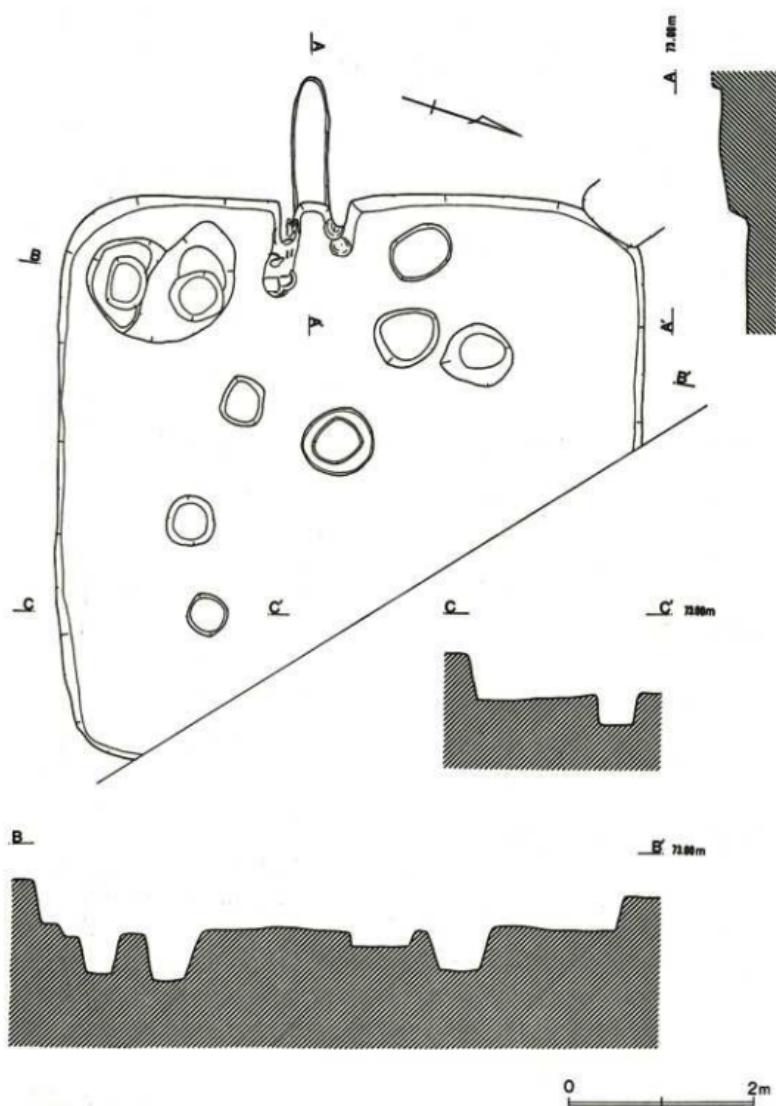
番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
5	壺	口径(11.5) 器高(3.9)	口縁部は短く外傾し、端部は外側に鋭く尖る。体部から底部は丸味を持つ。	内面から口縁部外面は横ナデ。体部底部は横位のヘラケズリ。	A+B'+D+E 内外:赤褐色 2/5存 カマド
6	壺	口径(24.6)	口縁部は外反し、端部は細く丸い。胴部の器内は薄し、大きく膨らむ。	口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は斜位のヘラケズリ横位のヘラナデ。	A+A'+B+E 内外:淡赤褐色 3/10存 覆土
7	甕	口径(18.6)	口縁部は大きく外反する。端部は丸く、外側に屈曲する。胴部は少し張る。胴部と口縁部の境には緩やかな段を持つ。	全面に亘って、磨滅している為、整形手法不明瞭。	A+A'+B+C+F 内:赤褐色 外:淡赤褐色 1/5存 カマド

## 08 天神林遺跡16号住居跡（第39図）

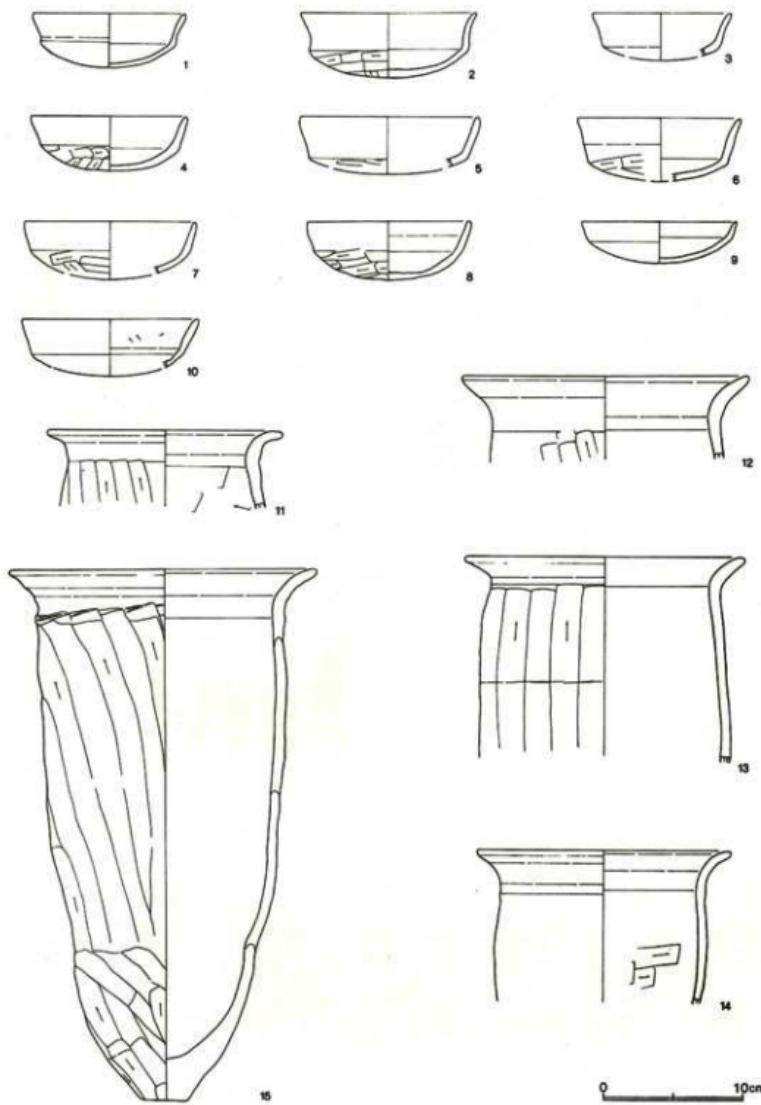
6.3m×6.0mのよく整った方形プランで、調査住居跡では6号住居跡に次ぐ2番目の大きさである。南側は調査範囲外であったがおよその形態はわかる。壁高は確認面下40~45cmでかなり深い部類に属する。北東隅部の土壤状ピットは16号住居跡より新しく掘られたものである。

床面は焼土、炭化物が多く散布していたが、これらの遺物が床面下10~15cmまでの土層中にまで検出できるので、掘形部が存在することがわかる。特に北西隅寄り部分は著しく、その分布が認められた。火災に遭った後も床面を修復して使用したと思われる。主柱穴は断面図に示した深いピットが相当する。位置はやや変則的である。床面下40~60cmでかなり深いピットである。その他変則的位置にあるピット群のうち、カマド前方の住居中央寄りにある3個のピットは上面に粘土質土が貼られた状況で、床面の一部として既に埋められていたものである。10~20cmの深さで、特に住居中央付近のものは2段に掘り込まれ、その位置とともに、やや異質なピットである。

カマド左側は柱穴の移動があり、周辺が若干掘り込まれて、特に焼土炭物が2~3層認められた。カマド右袖に接する2つのピットは貯蔵穴の位置であるが、床面下5cmで、その隣のピットも-13cm程度なので、貯蔵穴とは認めがたい。カマドは両袖型で長甕を補強材としている。左袖は基部と端部に長甕上半部を倒立させ、その中間は長甕の大形破片をつめ込んだ粘土で作られている。破片は長甕3個程度まで確認できた。右袖は基部に長甕の完形品を倒立させ、更に長甕上半部を倒立させて並べている。右袖は左側の90cmの長さに比して60cmであり、短くなっているが、これはやや延びていたことも考えられる。なお完形で倒立していた長甕は内部は全く空洞のままであり、その中に更に長甕上半部が倒立した状態ですっぽりと入っていた。カマドの燃焼部は焼けていたが、その状態は明瞭ではなかった。壁外には長さ1.45m、幅35cmの長大な煙道がのびてその焼土は15号住居跡の覆土中にまで認められた。出土遺物はカマド内で壺が出土している他、床面から長甕、壺が多く出土している。



第39図 天神林遺跡16号住居跡



第40図 天神林遺跡16号住居跡出土遺物(1)

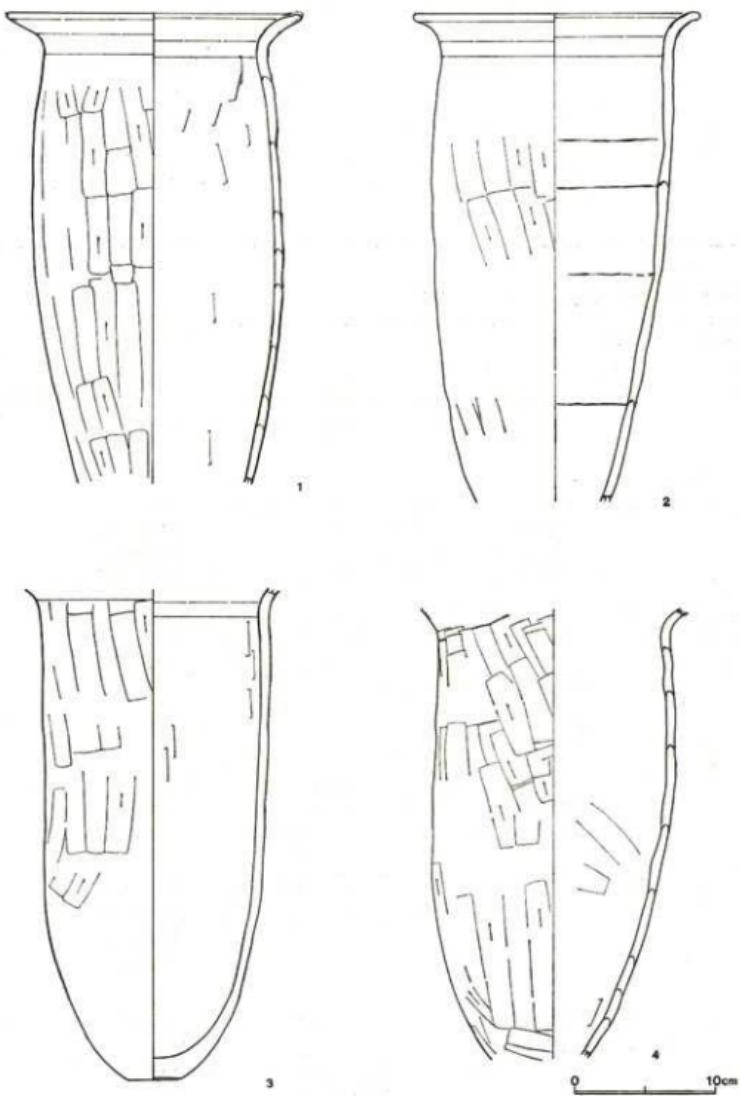
## 天神林遺跡16号住居跡出土遺物(1)(第40図)

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	壺	口径(11.1) 器高(3.8)	口縁部は外反し、外傾する。端部は丸く、肥厚する。体部との境の稜は明瞭。体部は丸く、底部へ移行する。	口縁部内外面は横ナデされるが、体部から底部内外面は磨滅している。	A' + E + F 内外：淡赤褐色～淡茶褐色 7/20存 床
2	壺	口径 12.6 器高 4.7	口縁部は外反する。端部は細く尖る。稜は緩やかである。体部から底部は丸味を持つ。形態やや歪む。	内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は横位。底部は縦位のヘラケズリ。	A' + E + F 内外：淡赤褐色 9/10存 覆土
3	壺	口径(10.0)	口縁部は緩やかに外反する。端部は細く丸い。体部と境の稜は緩やか。体部は丸味を持つ。	全面に亘って、磨滅している為、整形手法不明瞭。	A + E 内：淡茶褐色 外：黒褐色 3/20存 床
4	壺	口径 11.2 器高 3.9	口縁部は外傾する。端部は丸い。体部との境の稜は緩やかである。体部は丸味を持ち、底部へ移行する。形態整う。	内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は横位から斜位のヘラケズリ。	A' + B' + E + C 内外：淡茶褐色～淡赤褐色 19/20存 カマド
5	壺	口径(13.0)	口縁部は内湾ぎみに外傾する。端部はやや尖る。	内面から口縁部外面は横ナデされるが、殆ど全面に亘って磨滅している為、整形手法不明瞭。	A + A' + B + F 内外：暗赤褐色 1/5存 床
6	壺	口径(11.8)	口縁部は緩やかに外反し外傾する。体部との境の稜は不明瞭。	全体に磨滅が目立つ。体部外面は不定方向のヘラケズリ。	A' + E + F 内：淡黒褐色 外：赤褐色～茶褐色 2/5存 床面
7	壺	口径(12.4)	口縁部は外傾し、端部は細く尖って内湾する。丸味を持って体部へ移行する。	内面から口縁部外面にかけて横ナデ。体部外面は不定方向のヘラケズリ。	A' + E + F 内外：淡赤褐色 3/20存 覆土
8	壺	口径 12.0 器高 4.2	口縁部は内湾ぎみに外傾する。端部は丸い。稜は緩やか。体部から底部は丸味を持つ。体部から底部は部分的に器内が薄い。	内部から口縁部外面は横ナデ。体部外面は斜、横位のヘラケズリ。	A' + F 内外：赤褐色 完存 カマド
9	壺	口径(11.1) 器高(3.0)	口縁部は外傾する。端部は細く丸い。体部は丸味を持ち底部へ移行する。	内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は磨滅の為、整形手法不明瞭。	A' + F 内外：暗茶色 底部：黒褐色 1/5存 床

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
10	壺	口径(12.7)	口縁部はやや肥厚し、外傾する。端部は丸い。	内面から口縁部外面は横ナデ。体部外面は磨滅している。口縁部中央にはヘラ状工具の痕跡を留める。	A + F 内外：淡赤褐色～淡褐色 3/10存
11	甕	口径(17.0)	口縁部は大きく外反する。端部は丸い。口縁部内側には浅い沈線をもつ。胴部は僅かに張る。形態良好。	口縁部は横ナデ。胴部外面は縦位のヘラケズリ。内面は横方向のヘラナデ。	A + A' + B' 内外：暗赤褐色 1/5存 覆土
12	甕	口径(20.7)	口縁部は外反する。端部は丸い。胴部は少し張る。	口縁部は横ナデ。胴部外面は縦位のヘラケズリ。	A' + B + C + E + F 内外：灰茶褐色 1/5存 床
13	甕	口径(20.2)	口縁部は肥厚し、大きく外反する。端部は丸い。胴部は僅かに張る。輪積みによる未調整部を残す。	口縁部は横ナデ。胴部外面は縦位のヘラケズリ。内面は磨滅している為、整形手法不明瞭。	A + B + C + D + F 内外：暗赤褐色 2/5存 カマド袖 良好
14	甕	口径(18.3)	口縁部は大きく外反する。端部は丸く、やや上端が肥厚する。胴部との境の段は緩やかである。胴部はやや膨らむ。	全面に亘って磨滅している。部分的に胴部内面に横位ヘラナデが残る。	A + B + C + E + F 内外：灰茶褐色 1/5存 貯藏穴
15	甕	口径 22.2 器高 38.2 底径 3.2	口縁部は大きく外反する。端部は丸い。胴部と口縁部の境に緩やかな段を持つ。胴部上半は直線的で、下半は丸味を帯び輪積痕による段をもって、突出した底部へ移行する。	口縁部は内外面とも横ナデ。胴部外面は縦位及び不定方向のヘラケズリ。底部ヘラケズリ、口縁部内面には浅い沈線が2本残る。	A + A' + B + C + E + F 内：淡赤褐色 外：暗赤褐色 9/10存 カマド左袖

## 天神林遺跡16号住居跡出土遺物(2)(第41図)

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	甕	口径(21.1)	口縁部は大きく外反し、端部は丸く、内側には浅い沈線が巡る。胴部は中位で膨らみ、次第に内湾する。胴部に未調整部を残す。	口縁部は横ナデ。胴部外面は粗い縦位のヘラケズリ。内面に不定方向のヘラナデ。	A + B + C + D + E + F 内：淡赤褐色 外：暗赤褐色 2/5存 カマド左袖
2	甕	口径(20.3)	口縁部は外反し、端部は丸く、外側に屈曲する。胴部は上半で僅かに張り、下半は内湾ぎみである。輪積後の調整丁寧。	胴部外面は全体に磨滅が進行しており、整形手法や不明瞭。口縁部は横ナデ。	A + F 内：淡赤褐色～灰茶褐色 外：黒茶褐色 3/5存 床

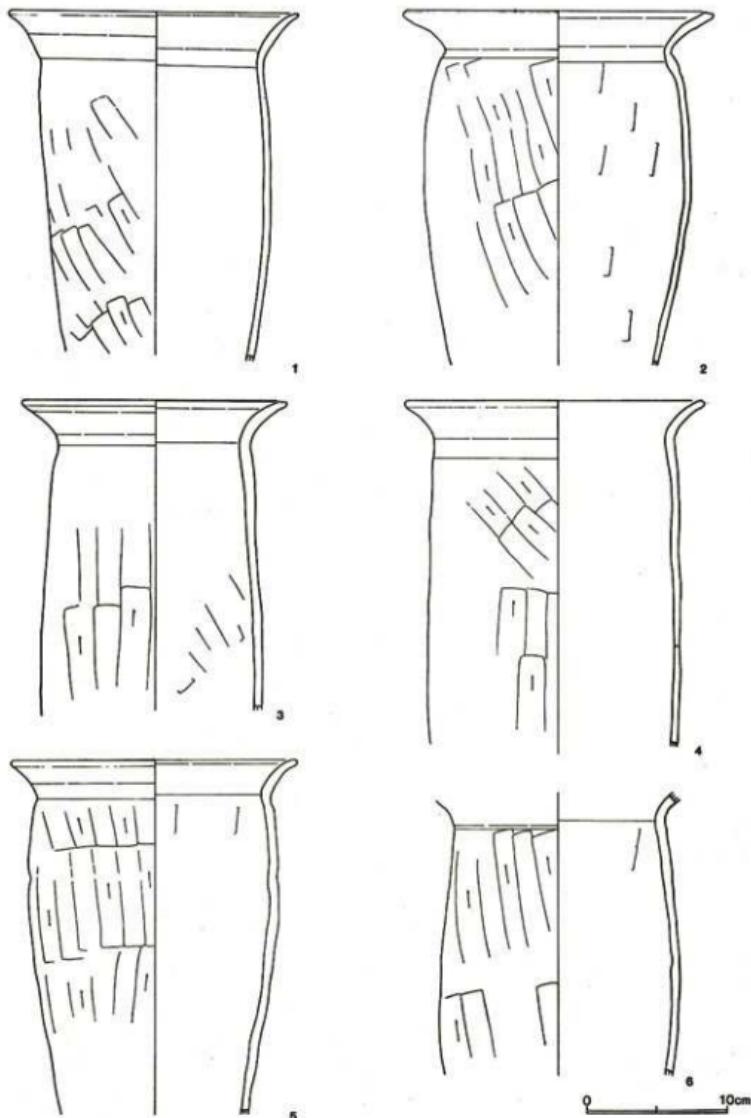


第41図 天神林遺跡16号住居跡出土遺物(2)

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
3	甕	底径 3.9	胸部はやや直線的で、下半部で内湾して底部へ移行する。底部はやや上底気味で、胸部との境は不明瞭。	胸部外面上半は縦、斜のヘラケズリ。下半は磨滅、内面は横位のヘラナデ。底部ヘラケズリ。	A+B+C+D+E+F 内：暗赤褐色 外：赤褐色～淡赤褐色 2/5存 床
4	甕	胸径 16.1	胸部は中位でやや膨らみ次第に内湾して底部へ移行する。	胸部は上半が斜位、下半が縦位のヘラケズリ。内面は磨滅。	A+C+E+F 内外：赤褐色～暗赤褐色 1/2存 カマド左袖

天神林遺跡16号住居跡出土遺物(3)(第42図)

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	甕	口径(21.1)	口縁部は大きく外反する。端部は細く丸い。胸部はあまり張らない。形態やや歪む。	内面から口縁部外面にかけて横ナデ。胸部外面は斜位及び不定方向のヘラケズリ。	A'+C+F 内外：暗赤褐色～灰黒褐色 3/10存 カマド右袖
2	甕	口径(21.9)	口縁部は大きく外反する。端部は丸く、内側に一本の沈線を持つ。胸部との境は緩やかである。胸部は上半で大きく張る。	口縁部は横ナデ。胸部外面は斜位のヘラケズリ。内面は横位のヘラナデ。	A+A' 内：暗赤褐色 外：赤褐色 3/10存 覆土
3	甕	口径(18.9)	口縁部は大きく外反する。端部は丸く、内側に一本の沈線がある。胸部は下半で張る。整形は丁寧。器肉は下半ほど薄い。	胸部下半部外面は縦位のヘラケズリ。内面は斜位のヘラナデ。他は磨滅の為、整形手法不明瞭。	A+A'+B+F 内外：暗赤褐色 2/5存 カマド右袖
4	甕	口径(21.3)	口縁部は大きく外反する。端部は丸い。胸部は口縁との境に段ではなく、直線的である。整形丁寧。	口縁部は内外とも横ナデ。体部外面上半部は斜位下半部は縦位のヘラケズリ。内面は磨滅の為、整形不明。	A+A'+B+C+F 内外：赤褐色 2/5存 覆土
5	甕	口径 20.1	口縁部は内傾ぎみに外反して外傾する。胸部は上半部でわずかに張る。	口縁部は横ナデ、胸部内面の横のヘラナデ。外面は縦位のヘラケズリ。	A'+B+E+F 内：暗赤褐色 外：茶褐色 3/5存 床
6	甕	胸径(17.0) (最大)	胸部は若干、下半部で張る。	口縁部内外とも横ナデ。胸部外面は斜位のヘラケズリ。内面はヘラナデ。内面は磨滅目立つ。	A+A'+B+F 内：淡赤褐色 外：暗赤褐色 1/2存



第42図 天神林遺跡16号住居跡出土遺物(3)